

「未来につづく働き」

東加茂聖書教会 泉田 勝栄



すると、王は彼らに答えま
す。『まことに、あなたがた
に言います。あなたがたが、
これらのわたしの兄弟たち、
それも最も小さい者たちの
一人にしたことは、わたしに
したのです。』マタイ25・40

昨年九月に迷子になっていた小学二年生の女の子を保護したとして、小学五年生の男の子に警察署から感謝状が贈られたとの記事がありました。保護した小学五年生は、「辺りは暗く、付近に保護者らしい人が見当たらなかった。通りかかる大人は何もしなかったで自分が何とかしないといけないと思った。人の役に立つことができてよかった」と喜んでいました。私はその記事を読みながら、「なぜ通りがかる大人は何もしなかったか。またその場に自分がいたのならどうするのか?」ということを考えさせられました。もし近くにいた大人が声をかけていた

のなら、女の子は泣かずに済んだはずですよ。

最近はいろいろな理由で人間関係を築くことが難しくなり、人間関係が希薄となつていきます。またそのことにより孤独を感じている人もいます。

イエス様は、どのように見ておられるのでしょうか。「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」

イエス様は、最も小さな者たちの一人にしたことは、わたしにしたのであると言っておられます。そして一人ひとりには神様によって、つくられた尊い存在なのです。私たちの教会に来ているお友だち(子ども)一人ひとりに声をかけること、このこともイエス様は「存じ」であり、イエス様に対してしていることと同じことです。地域社会にいるお友だち(子ども)に対しても同じです。イエス様の言葉は、死から永遠の命へ導く言葉です。私たちはイエス様の言葉を神様から託されています。

どんなに小さな働きでさえも、神様は覚えておられます。この働きは未来につづく働きです。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「主に喜ばれる教会学校（後）」	3
詩歌 $\blacktriangle 7/4 \blacktriangledown$	11
キリストとは誰か $\blacktriangle 7/11 \sim 8/8 \blacktriangledown$	17
モーセ $\blacktriangle 8/15 \sim 9/19 \blacktriangledown$	47
キリストとの出会い $\blacktriangle 9/26 \blacktriangledown$	83
カリキュラム	89
「牧羊者」のご購読・ご利用について	90
おわりに	90

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
 団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
 版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
 どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
 上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）

主に喜ばれる教会学校（後）

長島 幸雄

長島幸雄師（一九一三～一九八六）はかつての教会学校局の初代局長で、『牧羊者』の名付親です。以下の講座は、『牧羊者』一九八七年4月号から9月号まで、6カ月 にわたって連載されました。現在でも傾聴に値する重要な内容です。前号に引き続き掲載させていただきます。

最後に、奉仕の動力について申し上げます。どんなに良い知識が与えられても、私たちのうちに力がなければ、良い奉仕をすることはできません。そこで、奉仕の動力である、次の5つのことを挙げます。

- ① 聖霊の力（使徒1・8）
- ② みことばの力（I ペテロ1・23）

- ③ 祈りの力（ヤコブ5・13～18）
- ④ 信仰の力（マルコ16・16～17）

- ⑤ きよめの力（II テモテ2・20～21）

まず、第一の聖霊の力についてはいうまでもなく、聖霊がお働き下さらなければ、どんなに一生懸命、熱心であつてもむなしきものです。聖霊が働いて下さるようにとゆだねつつ奉仕していきたいものです。

第二にみことばの力です。孫の下に妹が生まれる時、1週間ほど母親の出産のために、母親と離れて過ごさなければならなかったのですが、そのことは、三歳になるその子どもにとっては、非常に寂しい、また憤りに満ちたものだったようです。ところが、ある聖日に、教会学校のメッセージの中の、「あなたには私がついている」と

いうみ言葉が、その子どもの心の中に入ってきました。あなたというのは、自分のことで、私がついているというの、イエス様のことだとわかり、「神様ががついているから、私は怖くないんだ」と告白するようになりました。ですから、大人たちが何か困ったことが起きた時、動揺して、「困ったなあ」と言っていると、不思議そうに言うのです。「どうして困っているの?『あなたには私がついている』って書いてあるじゃないの」と。み言葉には、偉大な力があるということですね。

私たちも、子どもと接していく時に、み言葉の持つ力を信じて、たとえ説教は下手であったとしても、み言葉の力が子どもたちのうちに生命を与えていくのだと信じ、奉仕の動力をみ言葉においてやっていってほしいと思います。

第三に、祈りの力です。よく証しで聞きますけれど、「分級などで子どもが騒いで騒いで、もうどうにもならない。泣きなくなってくる」。そういうことを経験する時というのは、必ず祈りが不足しているのです。そんな時は「子供が騒いで困ります。どうか助けて下さい」と祈りこんでいく時、子どもがそーっと話に聞き入ってく

れるということがあるのです。まことに祈りは力です。第四の奉仕の動力となるものは、信仰の力です。

「その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくなことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである」(マルコ 16: 14、口語訳、以下同様)。

復活のイエス様によって、信仰というものは、もう一つすばらしい力を持つようになりました。しかし、復活されて、最初に弟子たちになさったことは、彼らの不悟仰と心のかたくなことをお責めになったということ。これは、イエスが先に「よみがえる」とおっしゃったことを忘れ、また、現によみがえっていることを聞いても信じなかったことに対して、罰則を与えるかのように、「なにごとであるか!」と、きつく叱られたのです。彼らは恐れおののいて、あらためて復活の主に対する信仰をもつに至りました。そして、その信仰は信じる者に聖書に書いてあるしるしが伴うということです。ですから、信仰の目から見れば、もう絶対、ダメだ!というものは何一つないのです。私が40年近く教会学校をやってみて

思うことは、人間というものはこんなにも変わるものか！ということです。良く変わる方の例で言いますな

ら、教会の中をチヨロチヨロ、チヨロチヨロ動きまわって、2階から何度落ちたか分からない子がいて、野外礼拝をする時も、教師会で話し合って特別に一人監視役をつけないければ野外礼拝ができないという調子でした。また、教会の礼拝堂のいすの上をポンポン、ポンポンとびまわって、その子が来るや、もう集会がダメになる。ですから、先生も「どうか主よ、今日あの子が体みますように」と冗談ぬきで祈るほどでこずった子どもがいたのです。しかし、その子どもが中学を終えて高校に入る時、回心してガラッと変わったのです。ですから、信仰の力、復活の主を信じる信仰には、不可能が何一つないのです。

さて、CS奉仕の動力について考えてみたいと思います。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」(マタイ28・19〜20)。これは、大変有名な言葉であります。キリスト教の教育、あるいは、教会学校の教育ということについて、視点をどこ

に置くか、という面で重要なキーポイントとなるみ言葉であります。

一般に「教育」という場合は、その人の持っている特質を引き出してあげる。例えば、Aは、Aの特質があるから、それを型にはめないでAの特質を伸ばしてあげる。このように、個性を伸ばす、ということが、一般の特に、戦後における教育なのですが、教会教育の場合は、全く違うのです。「すべての国民を弟子とし…」ですから、イエス・キリストの弟子とすること。つまり、ひとりひとりの個性を伸ばす、というようなことの前に、キリストの弟子化なのです。Aという個性があり、Bという個性があるうと、キリストの弟子にみんなあてはめてしまうことなのです。

教会学校の最終の目的とは何かというと、子どもに伝道し、その子どもをクリスチャンに、つまり、キリストの弟子とすることに他ならないのであります。ですから、なまじつか教育理論など学んでいると、キリスト教とぶつかってしまうことがあるのではないかと思えます。教会はあくまでもキリストの弟子化するところの教育、人物を造っていくことに教会学校の焦点があるので

す。

さて、そこで教師に必要な力というものを挙げてみたいと思います。

第一に、それは人を集める力です。その人がいると、不思議に子どもたちが集まってくるというような力が必要なのです。いくら先生がいても、子どもが一人も来ないのでは教育のしようがないのです。私の場合も、過去に教会学校を受け持ったとたんに、子どもが一人も来なくなってしまうって悩んだ経験があります。ところが、そこを一つ乗り越えようと、不思議に何かしら子どもたちが集まってくる。子どもを集める何かが与えられてくるのです。それが、御霊の賜物（カリスマ）です。最初、人を集めることに苦勞するけれど、後には苦勞はいらない。つまり、人が自然に集まってくるのです。それは教師自身に、御霊の賜物が与えられてくる時、現実になります。

第二に、人を感化していく力です。やはり教えても、教えで入っていくものではないのです。キャンプなどの時、子どもと飲食を共にしたり、食事する時一緒に祈ったり、家族が病氣だったとしたら分級で一緒に祈りましょう、というような日頃の子どもたちとの接触の中で、

子どもたちに祈りの必要性を教えたり、信仰の様々な感化を与えていくわけです。そういう感化力というのが教師には必要です。その力、人が自然に集まってくる魅力を求めて、私にも与えて下さいと祈っていくことです。

もう一つはメッセージです。話の上手下手ではなくて、何か楽しい、その先生が話すと子どもが聞き耳をたてて聞くというような、同じことを語っても、子どもが聞き耳を立てて聞くのと、全然聞かないのとでは大違いなのです。教師はメッセージに聞き入らせる、聞き耳を立てさせる、その魅力が必要なのです。教師として、人をひきつけていく何か、人に感化を与えていく何か、話に聞き耳を立てさせていく何か、自分の方から信者になりたいと、あこがれさせていく何かという、これらの何かが大変重要なのです。

さて、この「何か」とは何でしょうか？ それは、I コリント12章に書かれています。すなわち、それは御霊の賜物です。その賜物はみんな違う。ある者は足であり、ある者は目であり、耳であるように、各々違うけれども、その霊の賜物を持っていること。それが人をひきつける何か、あるいはメッセージに聞き耳を立てさせる

何か、人をキリストに導いていける何か、というこの「何か」なのです。

奉仕に力を与えてくれるもの、それは、ただ一つ。御霊による力以外の何ものでもありません。ですから、御霊の賜物を神様の前に求めるといことが必要なのです。

人間的欠如が丸出しのままであっても、御霊の賜物を与えられると、メッセージの時、相手に聞き耳を立てさせることができます。だから、私たちに人間的条件の技術がなくても、一番大事なのは、私たちが御霊の賜物に満たされるということです。

聖霊の働きには二つの面があると思います。

一つは、私たちに信仰を与えて救わせ、私たちの心を新しく生まれ変わらせ、私たちをきよめ、私たちの内に内住し、心を満たして下さるとい救いと成長に導く働きます。

それともう一つが、奉仕の動力、また、あらゆる行動の動力となる御霊の賜物を与えて下さるとい働きです。

さて、奉仕の動力として、第二に、教師にほしいものが

「力」であります。第二が、御霊の賜物です。第三は「祈り」です。その御霊の賜物を得る方法は「祈り」以外にないのでから。

祈りによって、自分の内に、聖霊は働いてくるし、また、相手の内にも聖霊は働いてくるのです。ですから、私たちは祈らなければなりません。祈らないと聖霊は働かない。助けが必要だと思ったら、祈らなければならぬのです。

「彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた。そのころ、百二十名ばかりの人々が、一団となって集まっていたが、ペテロはこれらの兄弟たちの中に立つて言った（使徒1・14～15）。この人たちが、集団を作って祈ったといことの目的は何であったかといいますと、5節の「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」、すなわち、聖霊のバプテスマを授けられて、御霊の賜物にあずかるために祈っていたのであります。そして、その祈りの応答として「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、

突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起つてきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」(使徒2・1-4)。これが、聖霊がそがれるということですよ。祈っていると、聖霊がそがれるのです。ですから、皆さんも、自分の受け持ちのクラスの生徒の名簿を開いて、一生懸命に祈ってみてください。皆さんは、とことん追いつめられた経験があるでしょう。私に献身する前、自分が教会学校を受け持っていた時、生徒が一人も来なくなつて、分級の時間に自分のクラスに一人も生徒がいらない、という経験をしたことがあります。その時、自分が受け持ったことは失敗だったんではないか、「他の人にやらせればよかった」と周りの人から言われているんではないか、というような恥ずかしい思いになったことがあるのです。

私は、自分の心の内をさらけ出して祈りました。「神様、私は専門家の伝道師でもなんでもないし、『なれ』と言われるから教師になつたけれど、生徒が全然来なく

なつてしまいました。神様から預かっている魂だと言われるけれども、神様、素人の私が、こんなふうに追いつめられているんです。このままだったら神様の栄光に傷がつきますから、どうぞ一つ助けて下さい」と、くやし涙と情けなさと、どうしたらよいかわからないところまで追いつめられて、お祈りしたのです。

見捨てられたような、敗北感を感じて祈った祈りでしたが、このお祈りによつて、その時、御霊の力が与えられたのです。このどん底の経験を通して、人間の力ではない、自分をはるかに超えた御霊の力、御霊の賜物が、与えられたのです。その祈りのあと、少しずつ子どもたちは来始めました。

人を集める、ということは、人の力ではない、御霊の力なのだ、自分に御霊の賜物を与えて下さつて、人を集めさせて下さるのだ、ということがわかったのです。

祈っていると、自分のうちに、聖霊が働かれるし、子どもたちにも働かれる。そして、不思議に心が結ばれてくる。ですから、ある一つの時点に来ると「おいで」と言わなくても、子どもたちがドンドン集まつて来て、集めることに苦勞がいらなほどに、垣を乗り越えること

ができるのです。

さて、祈っていると、聖霊に満たされた、ということがわかるようになりますが、それには、次の三つのことがあります。

① 言葉が聞かれて、確信がわいてくる。

② 勝利感が与えられる。

③ 心に平安と喜びが溢れて讃美が出てくる。

土曜の夜などは、受け持ちの生徒の名簿を前にして、ひとりひとりの名を挙げて、祈りこんで下さい。

祈りも、例えば、「子どもが少ないんです。どうぞよろしく願います」だけで終わっていたのではダメで、勝利が与えられるまで祈る、これを「祈りがやぶれる」というのですが、「神様、これでいいんですか？ こんな状態でもって、あなたの大事な子どもを私に預けて、あなたが損をするのではないですか？ なんとかして下さい」と問い詰め、神様の前に迫っていくのです。そうすると、祈りの最中は、泣き言や敗北感があるが、祈りぬけると勝利感がくるのです。祈りの中で勝った！というまで祈りぬかないといけない。そこまで祈る必要があるのです。これが、御霊の賜物が与えられてくること

一つの秘訣です。

霊的な問題には、祈る人は強い。祈った人は必ず勝利する、祈らない人は負ける。なんといっても、祈って勝利を得ている人、祈りぬいている人は、顔に、目に出ていて、内から喜びがあふれ出てきています。

さて、次に大切なことは、教師の日常生活での訓練です。日頃の生活の中で、教師自身が祈って勝利をする、ということが必要なのです。そういう生活での積み重ねが、そのまま子どもたちへの証しとなっていくわけですから、責任重大です。だから、教師は自分の信仰生活の中で自分自身を訓練して、敗北の連続ではなくて、困難は次から次へと来るのだから、祈って勝ったという、どんな出来事でも負けて終わったことは何一つない、祈って全部勝利した、という記録の連続でなければならぬのです。

「祈って勝利。そして勝利の連続」。困難がいくら起こってもそれが問題ではない。ぶつかった困難から逃げ出さないで、一つ一つ勝利を収めていくという、教師自身、訓練をすることが大切です。

そして、次に、万事、好都合の時に祈って、み言葉を

与えられて行動するということが大切なことなのです。困難な時に、だんだんと訓練が身についてくると、困難を乗り越えられるようになります。しかし、案外、好都合の時と言うのは祈らないもので、また、祈らなくても何でもできるのです。例えば、字を書くのを得意としている場合に、「字を書いてくれ」と頼まれて書く。すらすらと思うように書ける。しかし、どんなに上手であつても、まず、書く前に「主よ、どうか御霊の賜物によつて力を与えたまえ」と祈る。これが大切なのです。―困難な時も、また、困難でない時にも、万事祈つて事を成す。―これが生活訓練です。そして、教師自身から自然に出てくるもの、それが子どもたちの信仰生活に及んでくるのであります。

では、まとめましょう。

私たちが、人を集める力、人に感化を及ぼす力、あるいはメッセージに子どもの聞き耳を立てさせていく力、子どもを信仰に導いていくところの力、そういう力というのは、聖霊の力です。御霊の賜物です。その賜物、力はどうすれば得られるかというと、それは、祈りです。祈る者には聖霊の力が与えられてくる。ですから、万事

祈ること。祈るのも、自分自身の生活の中で起こつてくる困難に対して逃げないで、祈りぬいて勝利を収め、また、平和な、好都合の時にも祈つて事を成していくこと。これらのことが、日々、御霊の力が加えられていく秘訣であるということをお話して、終わりたいと思います。

(完)

(※「牧羊者・二〇〇三年度ⅡⅣ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。)

聖書

伝道12・1〜14

タイトル

創造者を覚える

暗唱聖句

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。
伝道12・1

目標

造り主なる神を信じる生涯の幸いを知る。

導入

(和田牧子)

皆さんは、幸せだなーと思うときはありますか。大好きなハンバーグを食べているとき？ 温かいお風呂にゆつくりとつかるとき？ ゲームで大勝利したとき？ 幸せだなーと思えることが沢山ある人はそれこそ幸せですね。それでは私たち人間にとっていちばん幸せなことは何でしょう？ そんなことを今日は考えてみたいと思います。

すべては空

今日の聖書箇所、伝道者の書を書いた人は、イスラエルの王様のようです。この王様は、とてもかしこい知恵を神様から与えられました。また、大変多くのお金や財産、召しつかいを持っていました。何という幸せ。うら

やましいですね。

ところがこの伝道者の書には、ある言葉が何度も何度も出てくるのです。一章から読んでみると気がつきますよ。「空」という言葉です。「そら」ではなく、「くう」と読みます。1・2に「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空」と出てきます。伝道者の書全体ではなんと37回も出てくるのです。

「空」とはどういう意味でしょう。たとえば皆さんは「空腹」になったことはありませんか？ 「おなかからっぽでペコペコな状態」ですね。「空席」とは、「だれも席に座っていない状態」です。そこに何もないのです。「空」のイメージわいてきましたか？

それではこの聖書箇所に書かれている「空」とは、何からっぽなのでしょうか。それは「こころ」です。心の中がからっぽで、すべてはむなしく、さみしいのです。「えー、王さまといえは、えらい人だし、大金持ちだし、頭がよくて多くの人に尊敬されて、なんで心がむなしいの？」と思います。でも、いくら勉強しても、仕事で成功しても、そのとき楽しいと思えることをやってみても、やはりむなし、心からっぽだと言っているの

ですね。

造り主を覚える

ところが、最後の章で、今日のみことばが出てきます。「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」。

どこまでもむなしかった人が、心がからっぽでなくなる一つの道を見つけました。それは、わたしたち人間を造ってくださった神様を想うということです。

そもそままで私たち人間が今生きているのか。それは神様が私たちを創造してくださったからです。私たちはお母さんのおなかの中から生まれてきましたが、お母さんが私たちを造ったわけではありません。男の子か、女の子か、おとなしい子か、やんちゃな子か、だれも決めることはできません。ただ神様だけが、かけがえのない、特別な宝物として、私たちを造ってくださいました。この造り主、神様を想い、どんなときも信頼して生きる時に、あれれ？ 空しかったはずの心がボカボカしてきますよ！

最高の幸せ

私たち人間は、神様に愛され、神様に造っていただいたにもかかわらず、神様に背中を向けて、神様から離れ

ていつてしまいました。しかし神様はそんな私たちを追いかけて追いかけて、ついには大切な一人息子、イエス様をこの地上にお送りくださったほどでした。イエス様は、私たちの空しい心、さみしい心をよくわかってくださる方です。何より私たちが罪に打ち勝ち、永遠の命のなかに生きることができるよう、その命を捨ててくださったほどです！

皆さんのことが大好きで大好きでいっぱい、神様と共に歩んで行くときに、他のどんなことにもまして、幸せだなくと思えるのです。からっぽだった心の中に神様の愛が満ちあふれるからです。

朝、目が覚めたときも、ご飯を食べるときも、学校に行っているときも、どんな時もイエス様が一緒にいてくださいます。イエス様が助けてくださるので、くじけずうでくじけず、倒れそうで倒れません。

結び

今日のみことばには、「あなたの若い日に」とあります。どうか皆さんが、造り主である神様にお出会いし、イエス様と共に毎日を幸せいっぱいに過ごせますように！

♪海と空つくられた主は♪(イン8)

聖書 伝道12・13・14 テーマ 若い日に創造者を覚えよ

序論

(宮澤清志)

本日は伝道者の書のメッセージを通して、若い日に造り主なる神を知り、このお方を畏れ敬う生涯を送ることがいかに幸いであるかを学びたい。

一、いつさいは空である

伝道者の書は「エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば。」(1・1)である。恐らくソロモンであろう(1列王3・12)。「伝道者」(コヘレト)とは「集会を召集する者」とか「集会で語る者」の意である。ソロモンは民の代表者を召集して語った(1列王8・1、12)。ただし「伝道者」は匿名である。それはソロモンの残した言葉最後の人が編集したからだろう(12・9～14は編集後記である)。

〈空の空。すべては空〉。これが本書の一貫した思想である。〈空〉と訳される原語は「息」とか「蒸気」を意味する。これが転じて、「すぐに消えてしまう実体の無

いもの」という意味を持つ。本書にはこの語が37回も用いられる。

快樂、食欲、美食、性欲、妾、物欲、金銀、財宝、金錢、財産、遺産、邸宅、庭園、園芸、歌唱、事業、労働、業績、研究、知識、才能、名声、競争、権力、賄賂、不正、不条理、裁判、誓約、階級、貧困、虐待、戦争、災害、破産、病氣、疲労、痛み、怠惰、夢想、饒舌、愚痴、笑い、狂氣、忘却、忘恩、孤独、失望、悩み、高慢、怒り、憎しみ、妬み、呪い。〈いつさいは空である〉。

二、人はみな老いて死ぬ

人は誰も老いと死から逃れることはできない。〈創造者〉を知らぬ人の末路は〈わざわいの日〉である。〈何の喜びもない〉という高齢者がなんと多いことか。彼らの心は〈日〉が陰り、雨雲が立ち込める冬景色のようである。

腕は〈震え〉、背中は〈かがみ〉、歯が〈少ない〉ために噛みこなせず、〈目は暗くなり〉、耳は遠くなる。胃の調子が悪くなり、目覚めが早くて〈鳥の声に起き上がり〉、美しかった声も〈うなだれる〉(低くなる)。〈高い〉所が

恐くなり、《道》を歩くのも恐ろしい。《アーモンド》の《花》のように髪は白くなり、足腰が弱って足を《足取り重く歩》く。死期が近づいて、《永遠の家》に向かって行き、嘆く者たちが通りを歩き回る》。やがて体のあちこちが《切れ》、《砕かれ》て、死を迎える。

人間は「大地のちり」にすぎない（創世記2・7）。《土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る》。人は「母の胎から出て来たときのように、裸で、来たときの姿で戻って行く。自分の労苦によって得る、自分の自由にするのできるものを、何一つ持つて行くことはない。」のである（5・15）。

三、若い日にあなたの造り主を覚えよ

無常なる世に、生きる望みはあるのか。伝道者は説く、《あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ》。創造者を知ることによって、初めて人は自らの存在意義と限界を悟る。神は「人の心に永遠を与えられた」（3・11）。しかし、真理から目を背け、今しか見えず、欲望のままに生きるなら、まさに「人は獣にすぎない」（3・18）。

「若い男よ、若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心

を喜ばせよ。あなたは、自分の思う道を、また自分の目の見るとおりに歩め。しかし、神がこれらすべてのことにおいて、あなたをさばきに連れて行くことを知っておけ。」（11・9）。《神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである》。神の法を知らずに生きるのは無免許運転に等しい。事故に遭うのも無理はない。聖書を学び、み言葉に従って生きよう。そうすれば私たちの人生は実体のあるものとなり、私たちの心は満たされる。

結論

現代のメディアは子どもたちを単純な楽観主義、利己的な快楽主義、厭世的な禁欲主義へと導く。そこに救いは無い。虚無感と孤独と破壊が待つだけである。子どもたちに《あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ》と語ろう。「しかし私は、神を恐れる者が神の御前で恐れ、幸せであることを知っている」（8・12）。

研究資料

(加藤 満)

伝道者の書は「伝道者」(コヘレト)の知恵を、著者(1・12・9・14)が紹介する形式で語られる。中心的な思想として置かれている言葉は「空の空。すべては空」(1・2、12・8)。「空」(ヘ)は「蒸気、息」を意味し、目には見えつつも実質は無く、決して掴む事のできない様相を示している。人生のあらゆる事象が、それを追い求めるものの、結局「すべては空」であるというのがこの書の基調である。

12・1はその様な「すべては空」であるという現実への煩悶の結論部である。この結論を理解する為に、前提となる「すべては空」であるという伝道者の知恵を理解する必要がある。何故「空」なのか。要約すれば以下のポイントが挙げられる。

①この世界は同じ事が繰り返されるだけで、全体には何ら変化がない。

「川はみな海に流れ込むが、海は満ちることがない」(1・7)、その一方で「前にあったことは記憶に残っていない」(1・11)。だから、「日の下に新しいものは一

つもない」(1・9)と伝道者は語る。新しく見出したかのように思う富や快楽、事業や知識に没頭するも永続する利益とならず(2・1・23)、名声も続かず(4・16)、満足はない(5・10)。人は風の様に(1・6)ちりから出て、ちりに帰るしかない(3・20)。

②主権者である神の行動を人は変える事ができない(3・14)。

知恵による思索(1・13)や喜びも、神が特定の人特別な理由なく与えるものであって、自分で獲得するものではない(2・26)。財産を与えられても、楽しむことを許されない時がある(6・1・2)。また、正しい人が苦しむ現実も、神が悪しき者に対する罪状宣告を遅らせているのであり、人はこの状況を変えることはできない(8・10・14)。

③全てに適切な時があるにもかかわらず、そのゆらぎ故に、人は時を把握できない。

世界の秩序は規則性がありつつも微妙に不規則が混在している(3・2・8の詩の形式がそれを示唆)。その様なゆらぎの為に、知者も将来を完全に予測できない(8・7・8)。将来を思い通りに操作できない限界の故に、

短い人生は空しい(11・8～10)。

人は世界も人生も支配できず、その労苦は空しい(1・3)。しかし労働をやめるわけにもいかず、全力で取り組まねばならない(9・10)。では、この様な世界で人は何を求めて生きるべきなのだろうか。

一つは、「いつまでも残る儲けの為に生きること」を止めるよう勧められる。伝道者自身がそれを求めたが(2・4～11)、その様な儲けはいつまでも満足できず(4・8)、安眠を妨げ(5・12)、突如として全て失われ得る(5・14)。その様なものを求めるべきではない。

私たちが求めるべきものは、神の与える喜び、楽しみである。「楽しんでパンを食べ、陽気にぶどう酒を飲め！」(9・7)と伝道者は勧める。何故なら、神は既に人を喜んでいるから。神の下さる賜物は食事の幸せの様な日常に溢れている。その喜びを楽しむチャンス逃さないように(9・8)。時を逃さず、今ここに神が与えられている喜びを享受して生きる様にと勧めるのである。

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」(12・1)は、いのちを楽しめる日の内に、この様な賜物を与えて下さる神に心を留めなさいという勧め。「永続する

儲け」を追い続ける日々を脱し、神の賜物故に、隣人と共に生き(4・9、9・9)、気前よく生きるように招かれる(11・1～2)。その様に生きる時、私たちは不意に訪れる災いも乗り越えることができるのである。

テキスト

1 創造者 原文では尊厳を表す複数形。**わざわいの日**「若い日」と対比。肉体的な老いを意味する。

2～7 全体的に老年期の比喩である。

8 空の空 1・2の伝道者の言葉と関連。ここで伝道者の言葉が終ることを示している。

9～14 伝道者の書全体の著者の総括。伝道者の知恵は羊飼いが羊を追いやる「突き棒」のようなもの。突かれれば痛い、優れた神の知恵に生きる様に導く。また、神を抜きにした哲学的思索の為に多くの書物に当たる事も注意している。そこに答えは無い。不条理な世界で唯一確かな裁き主は神である。ただ神を恐れ、人の全てを以て神の命令を守る事を勧めている。

参考文献

聖書神学辞典『虚無』(いのちのことば社)、新聖書注解(いのちのことば社)、他

聖書

ヨハネ9・1～11

タイトル

心の目を開いてください！

暗唱聖句

わたしが世にいる間は、わたしが世の光

です。ヨハネ9・5

目標

世の光であるキリストの救いにあずかり、キリストに従って生きる。

導入

(飯田勝彦)

友だちが「昨日、学校休んだけど大丈夫？」とか、「宿題一緒にやらない」などと声を掛けてくれたら、どんな気持ちになりますか？ 嬉しいでしょう。友だちが自分のことを気にかけてくれる時、本当に励まされますね。今朝の個所ではイエス様が目の見えない人に、関心をもつて気にかけてくれたことが記されています。

イエス様は、皆さん一人一人のことにも関心を寄せ、いつも見てくださっています。

神のみわざが現れた人

ある時、イエス様が道を歩いておられると目の見えない人を見られました。イエス様は彼を裁いたり、軽蔑の目で見たりされませんでした。イエス様は、弱っている

人たちにも関心を示し、優しく接してくださる方です。もし皆さんがこの彼のように、目が見えなかったならどんな気持ちでしょうか？

道があるいている途中にイエス様は、おそらく足を止めじっと目の見えない人を見ておられたのでしょう。突然立ち止まったイエス様の視線の先を見た弟子たちは、イエス様に尋ねます。「この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか」。イエス様は「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」と答えられました。それから、唾で泥を作って彼の目に塗られました。彼が、イエス様が言われた通りに泥を池で洗うと、何と目が見えるようになったのです。まさに神のわざがこの人に現わされました。

神のみわざを現されたイエス様

旧約聖書に「主は目の見えない者たちの目を開け」(詩篇146・8)と記されてあります。ですから、目の見えない人の目を開くことができるのは、人ではなく主なる神様だけでした。ですから、イエス様は、まさに神様です。それを思うと皆さんは、これまでイエス様の多くの奇

跡を聞いてきたでしょう。その奇跡を皆さんは心から信じていますか？ 奇跡を聞くたびに心の中で「ホンマかな。うそくさい」と思ったりしていませんか。イエス様は神様ですから何でもできるお方です。足の不自由な人をいやすたり、水の上を歩いたり、嵐さえしずめることができましたのです。

イエス様は、多くの人々を助けるために、世の光として来られ、神様のわざを現されました。

神のわざを体験できる私たち

イエス様が目の見えない人の目を開き、神のわざを現されたのは、今から二千年も前のことです。そんな昔のことが今、現実におこるでしょうか。起こります！ 復活されたイエス様は今も生きて働いています。だから、今も私たちに神のわざを現してください。

イエス様を通して神のわざを体験する秘訣があります。それは皆さんがイエス様を心から信じ、イエス様の言葉に従うことです。

目の見えない人の目がいやされるためにイエス様は、目に泥を塗られました。それだけではありません。イエス様は目の見えない人に「行って、シロアムの池で洗い

なさい」と言われました。もし、彼がイエス様を信じず、イエス様の言葉に従って池に行かなかったなら、目はいやされなかったでしょう。

彼はイエス様の言葉を信じて池に行き、言われた通りに目を洗うといやされたのです。

今、イエス様は、皆さんの心の目を開きたいと願っておられます。心の目が閉ざされていると神様を信じることができません。皆さんの心の目は開かれていますか？ 心の目が開かれると、聖書が分かり、イエス様のことや神様のことがよくわかるようになります。そして、自分がどんなに神様から愛され、支えられているかを体験できます。そのためには、心の目を開いてくださるイエス様を信じることです。心の目が開かれると彼と同じように神のわざをあなたも体験します。

まとめ

心の目が開かれると心に光が入るように、皆さんの表情や生き方を明るくします。世の光であるイエス様を信じましょう。

♪イエスさまにまさる♪ (ホ65)

聖書 ヨハネ9・1～11 テーマ 世の光であるキリスト

序論

(高橋頼男)

道を歩いて行かれる途中、ふと歩みを止められたイエスは、道端で物乞いをしていた一人の目の不自由な人をご覧になりました。弟子たちは彼についてイエスに質問しました。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか」。イエスは、答えて「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです」と言われました。

驚くべき答えです。空しい、堂々巡りの過去の因縁やこだわりを全く断ち切り、新しい将来を描かせ、希望をもって生きる力を得させる、素晴らしい力ある言葉です。

一、古くからの問い(1～2)

二〇一一年3月11日、未曾有の東日本大震災が起きました。その被害が詳しく報じられ、深刻な原発の問題も明らかになるにつれて、世界中がその惨禍に震撼し、大変な問題として受け止めました。多くの人々の思いが

突き動かされ、同情と奉仕のところが起こされました。同時に、「なぜ、こんな悲惨な災害が起こったのか」という素朴な疑問も生まれ、今まで、神のことなど関係なく生きていた人々が、にわかに「神」を問い出しました。「神さん、ひどいことしよる」。「天罰だ!」とは、そのようなかで出てきた物議を醸す一つの解答です。

道端の目の不自由な人を見た弟子が「だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか」と、古くからある問いをイエスに投げかけました。「因果応報」の考えは、古くから多くの国や民族の間にもあるようです。一つの結果には必ずその原因があるという解釈です。とくに、これは苦しみの中にある人を、さらに深い苦しみの闇に突き落とし、非常に冷酷で、突き放した人生観、世界観へと導きます。その背後には非人格的で気まぐれな神観(神についての考え方)があります。

二、問題にかかわられる神(3)

弟子たちは、通りかかりの道端で、たまたま物乞いをしていた目の不自由な人を見て、イエスに日頃の疑問を尋ねたのです。通りすがりに、目の不自由な人の面前で、彼の生活と全くかわりのない世界から、「生まれつき

の盲人」を題材に、信仰問答や神学論争を仕掛けたのです。何と心ない言動でしょうか。しかし、イエスのお応えは、弟子たちの発想や予想とは全く違っていました。

①まず、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。」と言われ、人々の頭に浮かぶ応報論のたぐいを否定されました。

②イエスは、弟子たちが期待した疑問に直接応対する答えをなさいません。「神さまは、わたしたちが答えを知りたいと切に願う疑問に必ずしも答えを与えられるわけではありません」(『なぜ私だけが苦しむのか―現代のヨブ記』H. S. クシュナー)。

③さらに、「この人に神のわざが現れるためです」と驚くべき言葉を語られたのです。

この言葉の中に、すでにこの目の不自由な人にかかわっていかうとされる神の心が明らかにされています。罪に満ちた人間世界を見捨てず、むしろ積極的なかわりを持つため、矛盾と意味不明、わけがわからなくなっている混沌こんとんの世界を引き受けるため、事実、神のま子はおいでになったのです。そして、ついに理不尽極まる呪いの十字架に自らつけられ、「わが神、わが神、どうして

わたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15・34)と叫びました。「どうして、なぜ」と問わずにおれないこの世界の悲惨、人生の矛盾や混沌に対して、これこそ、この事実こそ、神の答えではないでしょうか。

三、神のみわざが現れるため(3、6、7、25、38)

イエスは、この目の不自由な人の信仰を訓練し、導かれました。彼はお言葉に従い、シロアムの池に行って洗うと、見えるようになったのです。そして彼は、肉の目が開かれただけでなく、ついに霊の目も開かれました。迫害の中で主を力強く証しし、主を礼拝する者とされ、神の栄光のために生きる新しい人生が始まったのです。

私がお会いした目の不自由な信仰者10人のうちの10人が「私はヨハネ9・3のみ言葉で救われた」と感動をもって語られました。お一人お一人の内に秘められていた過去の煩悶はんもんを思います。しかしイエスのこの言葉が過去を断ち、未来に生きる勇気を与え、束縛から真の自由へと霊の目を開き、闇から光の世界へと導いたのです。

結論

神のご計画の最善を信じ、神のみわざが現れる生涯を生き抜きましょう。

研究資料

(中島啓二)

シロアムの池での目の不自由な人のいやしは、先に8・12でなされた「わたしは世の光です」という宣言の具体的な例証と言える。ベテスタの池での足の不自由な人のいやし(5章)と類似点も多いが、いやされる側に能動的な役割が与えられている点で対照的である。この人はイエスの命令に従い、その結果「神のわざ」が現れた。さらに彼は、曲折を経て、自分に恵みを施してくださった方の本当の姿を知ようになる。そして「主よ、信じます」(38)との信仰告白に至るのである。

テキスト

1 生まれたときから目の見えない人 当時、目の不自由な人は、生活のため、人々が慈善に心を向けやすくなる神殿近くで物乞いすることが多かった(使徒3・2)。

2 この人が盲目で生まれたのは 目的・結果を示す接続詞[ギ]ヒナが用いられている。「だれかが罪を犯した↓それゆえ目が不自由である」という発想である。当時のユダヤ社会では、目が見えないなどの苦難は罪の結果であると考えられた。「だれかが…」を当然の前提と見な

して、弟子たちの議論は「だれが…」に飛躍する。だれが罪を犯したからですか 両親の罪、胎内にいる時の本人の罪などを想定している(ただし本人の罪というとき日本人は前世の罪を連想するかもしれないが、ユダヤにその発想はない)。この応報(天罰)の発想は、ヨブの友人たちの考えからほとんど変わっていないものである。

3 この人に神のわざが現れるためです イエスも[ギ]ヒナを用いるが、弟子たちとは方向が正反対である。すなわち、「目が不自由である↓神のわざが現れる」という方向であり、これこそが神の発想である。ただし神が意図的にその人を目が不自由な者として誕生させられたと考えるのは早計である。測り知れない神の摂理があることを人は謙遜に受け止める必要がある。神は、摂理の中で、一見(あるいは一時的には)不幸に思えることを通して、結果的には、その人がイエスのみ顔に映る神の栄光を見ることができるようになってくださったのである。さらにそのわざを通して、周囲の人たちにも、イエスこそがまことの世の光であることを認めるようにと、方向転換を促されたのである。

4 わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼

のうちに行為しなければなりません 一義的にはご自身について語っている。「わたしが天から下つて来たのは：わたしを遣わされた方のみこころを行うためです」(6・38)。「昼のうちに」はご自身が世にいる間ということだろう(5)。その上で「わたしたち」(弟子たちや教会)もイエスの弟子であることを自覚し、そのわざを励むのである(14・12参照)。だれも働くことができない夜が来ます ユダがイエスから離れて「夜」に出て行ったことは象徴的である(13・30)。

5 わたしが世に在る間は、わたしが世の光です 8・12における宣言を踏まえての言葉。このいやしはまさにその宣言の具体的な例証と言えよう。

6 地面に唾をして：唾をいやしに用いる例はいくつかあるが(マルコ7・33、8・23)、土と混ぜてどろを作るのはここだけである。

7 シロアム(訳すと、遣わされた者)の池 シロアハ(イザヤ8・6)、シェラフの池(ネヘミヤ3・15)も同じ場所とされる。伝統的にヒゼキヤがギホンの水を引くために掘った地下水路(Ⅱ歴代32・30)の終点とされてきたが、2004年に南東100メートルほどの場所に新た

な遺跡が発掘され、今日そこが本来のシロアムの池と考えられている。その名はまさに神から遣わされた救い主であるイエスを指し示していると言えよう。そこで、彼は行って洗った。すると、見えるようになります：彼もまたイエスによって「遣わされ」、命じられたとおりに従った。すると、神のわざが現れ、彼は生まれて初めてその目で神の造られた世界を見るに至ったのである。

8・10 おまえの目はどのようにして開いたのか 長年そこで物乞いをしてきたその人を周囲の人はよく知っていた。それゆえ彼の身に起こったことを不思議がり、またなぜそうなったかを知りたがったのは当然であった。

11 イエスという方が：見えるようになりました 彼は簡潔に事実を伝えた。ここでは「イエスという方」という表現にとどまっているが、以後、彼の中でのイエス像は段階的に成長していく。すなわち「預言者」(17)、次に「神から出」た人(33)と変化し、最後には「主よ、信じます」と、信仰と礼拝の対象になるのである(38)。

参考図書 注解書 G. R. Beasley-Murray (Word), F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ヨハネ10・1～15

タイトル

良い羊飼いであるキリスト

暗唱聖句

わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。

ヨハネ10・11

目標

私たちのために命を捨ててくださった羊飼いきリストを信じる。

導入

(和田牧子)

皆さんのお家にペットはいますか？ 犬やネコ、ハムスターを飼っているお友だちもいるかもしれませんね。この世界にはいろいろな動物がいます。人間のお世話がなくても生きている野生の動物も沢山います。でも羊は「牧者」のお世話がないと生きていけないのです。牧者とは難しい言葉ですが、「羊飼ひ」のことです。

今日は、「わたしは良い牧者です。よい牧者は羊たちのためにいのちを捨てます」というみ言葉を味わいましょう。

迷子の羊

「わたしは良い牧者です」と言われたのはイエス様で

す。良い羊飼ひであるイエス様のことを忘れている人間はちょうど、迷子^{まいご}になった羊のようです。皆さんは迷子になったことはありませんか？ とつても心細いですよ。迷子の羊は、お腹はすくし、のどはかわくしで、困り果ててしまいます。恐ろしいオオカミやハイエナにおそわれてしまいます。危険ながけや深い谷もあるのです。しかも、迷子の羊は自分で羊飼ひのところに帰る事ができません。羊飼ひが探しに来て、見つけ出してくれなければ、死んでしまいます。

私たちもし、良い羊飼�であるイエス様のもとから迷い出してしまったなら、そこには危険や誘惑がいっぱい。迷子の羊と同じではないでしょうか。

羊飼�は野原に出かける時、羊たちの先頭に立って進み、羊たちを守ってくれます。そして羊たちも羊飼�の声を良く知っていて、ちゃんと聞き分けることができます。私たちも私たちの羊飼�、イエス様のお声をよく聞き分けることができるようになりますね。

良い羊飼ひ

それでは、良い羊飼�であるイエス様ってどんな方でしょうか？ 良い羊飼�は「羊のことを良く知って」い

ます。飼っている羊の名前を全部覚えています。そして、「めーちゃん今日は元気がないな」「しろちゃんはおちよと落ち着きがないな」って、よく分かってくれているのです。イエス様も私たちのことを、全部知ってくれていますよ。何が辛いのか、どうして泣いているのか。そして、いっぱい慰めてくださる方なのです。

そして、よい羊飼いは「門」になってくれます。え？ ということ？ 羊を飼う山では、夜になると羊たちは囲いの中に入ります。夜中は羊たちにとって、とっても危険なとき。羊を狙っておおかみやどろぼうがいつやってくるかわかりません。門となって番をしている羊飼いは、「わたしの羊はわたしが守る！ 羊に手出しはさせない。どうしても羊を襲うなら、わたしを殺してからにしろ」って、命をかけて守ってくれるのです。とってもたのしいですね！

十字架で死なれたイエス様

羊のためには命も惜しくないほど、どこまでも羊を愛する羊飼いです。そのお言葉どおり、イエス様は何と、ほんとうに私たち人間のために命を捨ててくださいました。神様から迷子になって、好き勝手に生きていた私た

ち人間が、もう一度神様と共に歩めるように、イエス様は十字架にかかって死んでくださったのです！ それだけではなく、三日目によみがえって、何と、今も、目には見えませんが生きて私たちと一緒に生きてくださっているのです。

皆さんはお家や学校で悲しいこと、つらいことがあるかもしれません。しかし羊飼いであるイエス様がいつも一緒にいてくださいます。また、怖いこと、罪の誘惑からも守ってくださいます。ひとりぼっちだなくと不安になるときも大丈夫。聖書の中にはイエス様の励ましや慰めの言葉がいっぱい書かれていますよ。もちろん、皆さんがうれしい時は一緒に喜んでくださる方です。

結び

イエス様は「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです」と言われました。ただの命ではなく、生き生きとした命にあふれているのです。色々大変なこともあります。イエス様についていけば、必ず成長していきます。イエス様に、どこまでもついていきましよう！

♪ちいさいひつじが♪（こ72、こ改55、新聖歌485）

聖書 ヨハネ10・1～15 テーマ 良い羊飼いであるキリスト

序論

(高橋頼男)

キリストは、〈わたしは良い牧者です〉、また、〈良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます〉と言われました。主イエスが、私の良い羊飼いであるということは、私にとつて、どういう意味をもつことなのでしょう。

一、弱く迷いやすい羊(イザヤ53・6)

羊は弱くて迷いやすく、また、迷っていることの自覚さえないこともあります。迷い出てしまった羊は、危険な状況にあります。羊を狙う猛獣がいますし、断崖や地表の割れ目など、あらゆる危険が待ち受けています。

主イエスは、私たち人間がおるべきところから逸脱し迷い出た存在であることを、「失われた者の三つの姿」(ルカ15章)のたとえを通して教えられました。これらは神を離れた人間の悲惨な姿です。そして、私たちの内には、神の尊さを頂きつつも、孤独や空しさ、存在の意味を失ってしまっている「失われた者の自覚」があります。

さらに、イエスは「人の子は、失われた者を捜して救

うために来たのです」(ルカ19・10)と言われました。主は迷い出たものを、そのまま放っておかれません。迷い出て失われたものを何としても救い出すために、覚悟と決意をもって行動なさるお方です。私たちは、弱く、迷い出てしまった一匹の羊ではないでしょうか。

二、良い羊飼(3～15)

主イエスは、私は「良い牧者」であると言われました。良い羊飼いとどのような者でしょうか。

①羊のことをよく知っている(3、14)

自分の羊のことに関するあらゆることを熟知している羊飼(こそ良い羊飼)です。彼は〈自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出〉すのです。一匹一匹の特徴と性質をよく知ったうえで、養い導いてくださいます。

②羊の門となる(7)

夜になると羊たちは囲いの中に入りますが、門には扉がありません。そのままでは危険ですから、その門のところに羊飼(が)身を横たえて、自らが門となって番をします。夜中には、羊を狙って猛獣や盗人・強盗がやって来ます。しかし門となって横たわっている羊飼(を)を踏み越えてでなければ、羊を襲うことはできません。良い

羊飼いは、体を張って羊を守るのです。主イエスは「わたしは門です」と力強く言ってくださいます。

③羊のために命を捨てる（11、15）

良い羊飼いは、自分の羊を守るために、盗人や強盗、恐ろしい猛獣などと命を懸けて戦います。そのため、時には羊飼いが命を落とすこともあったのです。しかし、やとわれの羊飼いは、自分の命を懸けることまではしません。自分の羊ではないからです。主イエスは、私たちをご自分の羊として取り扱われます。十字架に命を投出して愛してくださいました。

三、安らかな出入り、豊かな養い（9～10）

羊のことをよく知り、心にかけて、命までも与えてくださる良い羊飼いに信頼してついでいくなら、「やすらかな出入り」、すなわち、私たちの人生の初めから終わりまで、安らかで安全、充足していることが約束されています。

また、主は「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです」と言われました。良い羊飼いである主の豊かな養いにあずかせていただきます。その恵みと祝福は、詩篇23篇に言い表されています。

「主は私の羊飼いですから、必要なものはみな与えてくださいます。主は私を牧草地に*いこ*わせ、ゆるやかな流れのほとりに連れて行かれます。傷ついたこの身を立ち直らせ、私が最高に主の栄光を現す仕事ができるよう、手を貸してくださいます。たとい、死の暗い谷間を通ることがあっても、こわがったりしません。主がすぐそばにいて、道中ずっとお守りくださるからです。…まるで、あふれんばかりの祝福です。生きている限り、主の恵みといつくしみが、私についてきます。やがて、私は主の家に着き、いつまでもおそばで暮らすことでしょう」（リビング・バイブル）。

主は「わたしは良い牧者です」と言われます。私たちは「主は、私の牧者です！^{あずか}」と、心から応答し、その豊かな養いに与るものとならせていただきます。

結論

主イエスこそ私の良い羊飼いです。このお方は、弱く、迷いやすい私たちのことをよく知って、私たちを守り、導かれます。私のために、命さえ惜しまず与えてくださいました。私たちの羊飼いであるキリストを、新しく仰ぎ、このお方に信頼し、全てを委ね、お従いしましょう。

研究資料

(中島啓二)

前章で、イエスは生まれつき目が不自由であった人を見えるようにされたが、パリサイ人らはその人を会堂から追い出してしまった(9・35)。それは宗教共同体からの破門を意味する。そのことを踏まえて、イエスはこの牧者のたとえをパリサイ人たちに語ったのである。

このたとえの中で、良い牧者がイエスであることは言うまでもないが、盗人、強盗が当時の宗教指導者たちを指していることも明らかである。すなわち、神から、その所有である羊を託されていたはずの指導者たちは、目が不自由であったその人をも責任もって世話するべきであった。なのに、かえって彼を囲いの外に追い出してしまった。しかしその人はイエスというまことの牧者と出会い、その囲いに導き入れられるに至ったのである。

このたとえの背景にはエゼキエル34章がある。エゼキエルを通して神は、「あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊を屠るが、羊は養わない」(3)と、宗教指導者たちを糾弾した。羊を守るはずの彼らによって「わたしの羊は：散らされ」(6)た。それゆえ神は、

彼らから職を取り上げ、散らされた羊を捜し集め、その群れのために「一人の牧者：を起す」と約束された。「わたしのしもべダビデ：彼は彼らを養い、その牧者となる」(23)とある。今やその預言は成就した。すなわちダビデの子孫であるイエスこそが、神がその民のためにお立てになった最良の牧者なのである。

テキスト

1 羊たちの囲い 夜間、羊は石の壁で作られた囲いに入れられた。その壁の上部には、侵入防止のいばらがあった。盗人であり強盗です ユダヤの語彙では、家などに押し入るのが盗人、屋外で通行人などを襲うのが強盗である。牧者はその両者から群れを守る必要があった。

2 3 門 囲いの門は普通一か所に設けられ、門番によって守られていた。羊たちはその声を聞き分け：牧者は：それぞれ名を呼んで連れ出します 複数の牧者によつて一つの囲いが共用されることは普通であった。その場合でも牧者は門に立って羊の名を呼ぶだけでよかった。羊が飼い主の声を知っているからである。ここに牧者と羊との間の人格的な絆を見出すことができる。神はご自身の所有の民を名前で呼ばれる(イザヤ43・1)。

は：それぞれ名を呼んで連れ出します 複数の牧者によつて一つの囲いが共用されることは普通であった。その場合でも牧者は門に立って羊の名を呼ぶだけでよかった。羊が飼い主の声を知っているからである。ここに牧者と羊との間の人格的な絆を見出すことができる。神はご自身の所有の民を名前で呼ばれる(イザヤ43・1)。

5 ほかの人 宗教指導者たちを指す。彼らは見えないのに「見える」と言い張り、神から託された羊を間違った方向に導こうとした(9・41)。

6 彼らは：何のことなのか、分からなかった 自分たちこそ神から群れを託された牧者だと自認していた彼らには、たとえの真意が分からなかった。

7 わたしは羊たちの門です 「牧者のたとえ」の中に、短い「門のたとえ」(7・9)が挿入されている。「わたしは道であり…」(14・6)と意味的に近いと言えるだろう。イエスこそ、救いへの道、また門なのである。

9・10 わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです 良い牧者は、羊が最低限の必要のみを与えられ、なんとか生きながらえているだけでは満足しない。主の望みは、神の民が永遠の生命を受け、その人生を最大限の豊かさで生きることなのである。

11 わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます 盗人(不誠実な指導者たち)は、群れのためにではなく、自分の利益のために行動する。しかし良い牧者キリストは群れの羊を盗人や獣から守り、彼らに命を与えるために、自分の命をお捨てになる。

12・13 牧者でない雇い人 雇い人は、良い牧者が持っているような羊に対する人格的な愛を持ち合わせておらず、危険が迫るときには自分の安全を優先する。この雇い人がたとえの中で何を指すのかは定かではない。盗人などと並行して宗教指導者たちを指すと考えてもよさそうだが、雇い人は盗人のように悪意に満ちてはいない。何を指すにしても、それがたとえの中心ポイントではなく、それとの対比によって、良い牧者の性質がさらに浮き彫りにされるということが重要であろう。

14・15 わたしはわたしのもを知っており、わたしのものは、わたしを知っています 羊を知り、羊に知られているということが、良い牧者の証である。動詞[ギ]ギノースコー(知る)は現在形で、一時的でない永遠の知識を示している。父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです 父なる神と御子と間の、お互いを知るという特別な知識に基づく関係が、牧者と羊との関係にまで拡大されるのである。三位一体の永遠の交わりの中に招く、という人間の創造の目的が、ここにも表されていると言えよう。

参考図書 7月11日分と同じ。

聖書

ヨハネ11・17〜27

タイトル

いのちであるキリスト

暗唱聖句

わたしはよみがえります。いのちです。

わたしを信じる者は死んでも生きるのです。

ヨハネ11・25

目標

永遠の命の与え主キリストを信じ、永遠の命の希望に生きる。

導入

(土屋開夫)

突然ですが、「みなさん、イエス様を信じていますか？」そう聞けば、きっとここにいる全員が「信じてます！」と答えてくれるでしょう。じゃあもう一度、聞きます、「どれくらいイエス様を信じていますか？」

そう、ひと口に「イエス様を信じます」と言っても、どれくらい信じているかは、一人一人違うと思います。少しでも信じているのか、百パーセント信じているのか。イエス様のみことばの一つだけ信じているのか、全部を信じているのか。水たまりのように浅く信じているのか、海のように深く信じているのか。

イエス様は今日の場面で、「どれくらい、わたしを信じ

ているのか？」「本当にわたしを信じているのか？」と問にかけておられるのです。

死んでしまったラザロ

ベタニアという村にマルタとマリヤ、そして弟のラザロという三人兄弟がいました。イエス様はこの兄弟の家を何度も訪ね、みことばを語られました。ですから、彼らはイエス様を救い主であると、素直に信じていました。ある時、その弟のラザロが重い病氣にかかり、死にかかっていました。そこで姉のマルタはその事を、人を通じてイエス様に知らせました。色んな病氣の人を癒やされたイエス様が来て下されば、ラザロは癒されると信じていたからです。

けれども、イエス様が来られた時には、もうラザロは死んでお墓に葬られ、四日も経っていました。マルタはイエス様を迎えて言いました、「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(21)。つまり言い換えると「ラザロがまだ生きている内にイエス様が来てくださったなら、どんな病氣も癒やされたでしょう。でも、もう死んでしまったので、イエス

様、手遅れでした。あなたが来られるのが遅すぎました。』というガツカリの気持ちでしょう。

けれども、果たしてイエス様に「手遅れ」という事があるのでしょうか？ 私たちのお祈りに答えて下さる時、「遅れてしまった」という事があるのでしょうか？ 勿論、そんな事ある筈はありませんね！

今、イエス様を信じますか

そんなマルタにイエス様は「あなたの兄弟はよみがえります。」と言われました。マルタは「終わりの日」、つまり、やがてこの世が終わり、新しく神の国が造られる時にはよみがえる、という事を信じていました。その信仰は正しいのですが、イエス様のよみがえりの力を、何か遠い遠いまだまだ先の事の様に思っていたかも知れません。

私たちもそのような事ありませんか？ 教会学校で聖書のお話を聞いても、今の自分とは関係ない、遠い昔話のように思ったり、天国のみことばを聞いても、遠い未来の話のように思ったり。でもイエス様は今、今日、力のある方なのです！

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」とイエス様は問われました。マルタさんは「信じております」と答えましたが、心の底からは信じていなかったのでしょうか。それは信仰深い妹のマリアでも同じでした。

イエス様はするように、よみがえりの力を信じきれない人々を見て心が激しく震え、イエス様のよみがえりの力が現実の実際の力である事を見せるため、お墓に葬られていたラザロを生き返らせられました！

まとめ

イエス様の奇跡はいつも、イエス様の救いの力を教えるためでした。人はみな死にます。しかし今日、イエス様を救い主と信じているなら、いつかこの体は死んでも、魂は決して死なないのです。救い主イエス様のよみがえりの力を、今、信じますか？

♪主のちからを♪ (PW 25)

聖書 ヨハネ11・17～27 テーマ 命なるキリスト

序論

(石田高保)

私たちの生活と人生の中で思いがけないことが起きるのを避けることはできません。そういう中に主はどのようにに生き働いてくださるのでしょうか。

一、主は状況を支配しておられる

イエス様は三年半の働きの中で、エルサレムに上る時には、ラザロたちの家を定宿にしておられたようです。やがてこの家族に不幸が襲いますが、それを見越した上でなお「イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられる」ということに変わりはありません。私たちの祈りを聞いたり聞かなかったりすることはありません。しかも「あなたが愛しておられる者が病氣です」と、私たちも自分のこと、ほかの人のことのために執り成し祈ることが許されています。

そこにラザロが危篤であるという知らせが入ります。いつものイエス様ならすぐに行動を起こすはずですが、

この時ばかりはなぜか出発を遅らせています。11節によれば、主はラザロが死ぬのを待っていたことがうかがわれます。その心は「あなたがた(弟子たち)」が信じるため、「(神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになる)」ためでした。しかしマルタとマリヤは主が出遅れた理由を知りません。イエス様には彼らの及ばぬお考え、ご計画がありました。私たちがピンチのときや事がうまく運ばないとき、何の動きも見られないときでも、イエス様のほうでは着々と事を進めておられることを信じましょう。むしろ主はピンチを逆手にとつて、ご自身の栄光が現れるようにして下さいます。今、あなたにとつて思うようにいかない事態はどんなことですか。そこにも主が深く関わっておられることを信じますか。

二、主は不可能を可能にされる

主は「わたしはよみがえります。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きる」と言われましたが、死人がよみがえるとするのは、ほんらい人間には信じることはできません。そのような出来事を聞いたことがないからです。しかしイエス様はその不可能を可能にしてしま

われました。死んで四日も経つラザロを墓の中からよみがえらせたのです。主ご自身も死んで三日目に墓の中から復活しました。そしてイエス様とつながっている人も、その命によってよみがえることができます。からだは灰になっても、霊は天において生きるので。主の再臨の朝、今度は栄光のからだを与えられます。(生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません)、そのとき生きているクリスチャンは死なないうで天に上げられます。今はやがて復活する「永遠のいのち」(10・28)を持つて生きているのです。

マルタの信仰は見事です。(あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、わたしは今でも知っています)と告白しました。イエス様ももっと早く来て下さったならラザロが死ぬことはなかったと言いつつも、イエス様には想像を超えることをする力があると信じています。これはイエスさまの時代から千五百年も前に、アブラハムがひとり息子のイサクをいけにえとして献げようとしたときのアブラハムの信仰に通じます。彼は神の命令によってイサクをいけにえにしても、神はどのような形かわからないけれども、元どお

りにして帰してくださるという信仰を働かせました。

これに対して主は、すぐに(あなたの兄弟はよみがえります)と断言します。彼女はラザロが終りの日、つまり最後の審判に復活することは信じていました。しかし主は彼女の復活信仰を今すぐに成就させようとし、終末という遠い未来ではなく、これからまもなくラザロがよみがえるのを見ることになるのです。彼女はイエス様が生も死も支配し、不可能を可能にされるのを体験することになりました。

復活の信仰とは、神が不可能を可能にしてくださることを受け取るものです。目に見える望みは望みではありません。きょうイエス様は私たちに、不可能を可能にすることを(信じますか)と尋ねておられます。それに対して私たちはマルタのように(信じております)と答えるでしょうか。

結論

今しばらく静まって、自分の切なる願いは何かを探ってみましょう。そしてその実現が不可能に思えるならば、復活の信仰を下さいと求めましょう。主は生きておられますから、それをお与え下さいます。

研究資料

(中島啓一)

「墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、…よみがえって…出て来ます」(5・28) 29。ラザロのよみがえりは、この終わりの日に起こる出来事の前提、あるいは生きた「たとえ」と理解して良いだろう。神は終わりの日に、墓の中にいる者たちをよみがえらせるだけでなく、今、「子の声」を聞く者にも、よみがえりの命をお与えになるのである。

テキスト

17 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入られて、すでに四日たっていた。知らせを受けた場所からベタニアまで一日かかる距離があつたようであるから、姉たちがイエスに使いを送った日に、ラザロは死んで埋葬されていたことになる。イエスはそのことをご存じで、「ラザロが病んでいると聞いてからも、…二日」(6)の間、その死が確実になるまでご自身の「時」(2・4、7・6)を待っておられたのである。当時一般には、死者の魂は死後3日を過ぎてから、永遠に墓を去ると考えられていた。そのことから、この四日という日数は、

ラザロの死が、人々にとつてもはや動かしようのない事実であることを示している。

19 兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。ユダヤでは、埋葬から一週間にわたって葬儀が行われ、遺族が深い悲しみの日々を過ごし、人々の弔問を受ける。この慣習は〔シバー(七の意)と呼ばれ、今日も行われているそうである。その最初の三日間は泣く日で、イエスがベタニアに着かれたのは、その泣く日が終わった時であつた。

20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリヤは家で座っていた。ルカ10・38・42に描かれているように、行動的なマルタと内省的なマリヤという二人の性格の違いがここにも見られる。

21・22 主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。「なぜもつと早く来てくださらなかったのですか」という恨み言に聞こえるが、それだけでなく、「あなたがおられたら弟は必ず助かったでしょう」という、イエスに対する信仰も含まれている表現。それゆえ、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになる」と続くのである。

23〜24 あなたの兄弟はよみがえります イエスは、こ

れからすぐに起こる肉体のよみがえりについておっしゃったのであるが、マルタは、終わりの日のことしか受け止めることができなかった。当時のユダヤ教では、終わりの日のからだのよみがえりが一般に信じられていた（ちなみにパリサイ人はそのことを信じ、復活を信じないサドカイ人と対立していた）。しかしその信仰は、愛する者を失った悲しみの現実を取り去り、それを喜びに変えるには、あまりにも無力な信仰であった。このときのマルタを支配していたのは、究極の現実であるかのようにのしかかる死の重みだったのである。

25〜26 わたしはよみがえります。いのちです イエスは、マルタの信仰を再教育し、その不明確な信仰に喝を入れるように、こうおっしゃった。すなわち、死者をよみがえらせ、命を与えるお方は、ご自身が「よみがえり」と「いのち」そのものであると宣言されたのである。それはイエスが「永遠のいのちに至る食べ物」（6・27）を与えると言われた後に、「わたしがいのちのパンです」（6・35）と宣言されたのと似ている。マルタに求められたのは、イエスご自身を「よみがえり」また「いのち」

と信じる信仰であって、そのように信じる者は、終わりの日のよみがえりについて確信が与えられるだけでなく、今ここで永遠の命を経験することができるのである。

死んでも生きるのです 信じる者がイエスと結び合わされているなら、肉体の死を経験しても、イエスのよみがえりにあずかることができる。永遠に決して死ぬことがありません 「だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることがありません」（8・51）ともある。肉体の命には必ず終わりが訪れるが、命そのものであるお方につながった命は、いつまでも続くのである。イエスを信じる者にとって、肉体の死は、すべての終わりではなく、永遠の命の始まりなのである。あなたは、このことを信じますか この問いかけが、マルタのすばらしい信仰告白を引き出した。

27 あなたが世に來られる神の子キリストであると信じております マルタは、イエスの言葉を理解できたわけではなかったが、イエスの言葉を受け入れ、真心からの信仰を告白することができたのである。

参考図書 7月11日分に加え、村瀬俊夫（新聖書注解新約1）。

聖書

タイトル

ヨハネ14・1～6
道であるキリスト

暗唱聖句

わたしが道であり、真理であり、いのち
なのです。ヨハネ14・6

目標

天国への道であるキリストを信じる。

導入

(土屋開夫)

皆さんは、今年の夏は山や川に行きますか？ 今年はまだ行けないかも知れませんね。また行けるようになると思います。じゃあ、前に行った時のことを思い出してみてください。その時、川を渡るための「橋」を歩きませんでしたか？ アーチ型の大きな橋があれば、グラグラ揺れるような吊り橋もあります。

「橋」というのは、川のこっち側から川の向こう側に渡るための「道」です。今日の聖書の個所で、イエス様はご自分のことを、まるでその橋のような「道」であるとおっしゃったのです。どういう意味でしょうね？

心が騒ぐ弟子たち

イエス様は弟子たちに、もうすぐご自分が（十字架に

かかって）死なれる事と、その後よみがえられる事を予告なさいました。それを聞いて弟子たちは「イエス様は私たちを置いて、一体どこに行ってしまうのだろう？」と心が騒ぎ、とっても不安な気持ちになりました。

どうでしょう、私たちもそうかも知れません。「人が死ぬ」ということを考える時、おじいちゃんや、おばあちゃんが死んだ時、「人は死ぬとどうなるんだろう？ 死んだらどこに行っちゃうんだろう？ もう二度と会えないのかな？」と、とても不安になるかも知れません。

でもっ！ ここが聖書のスゴイところ！ イエス様の素晴らしいところです！ チャーンとその答えをバッチリ教えて下さっているのです！ スゴイですね、聖書って。天国についてこんなにハッキリ教えてくれるのは「神の言葉」である聖書だけです！

1節から3節まで一緒にもう一度読んでみましょう。まずイエス様は「心を騒がせなくていいよ。心配しないでいいよ」と、弟子たちに優しく言って下さいました。

続いて、父なる神様を信じ、また、わたし（御子イエス様）を信じなさい、と言われました。

そして、なんとイエス様は、これからひと足先に父なる神様の家、つまり天国に行つて、あなたがたのために場所を用意する、と言うのです！ だから心配しなくていい、皆で天国の父の家でまた集まるのだ！と。

なんて素晴らしいんでしょう！ 私たちは、体が死んだ後は、素晴らしい天国に迎え入れてもらえるのです！

十字架の橋、救いの橋

それでも、疑い深い（信じるのが遅い）弟子のトマスさんは、「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」（5）と、まだ不安そうな顔で聞きました。

するとイエス様はこう答えられました、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」（6）。

最初に話した「橋」のことを思い出してください。確かに、神様が住まわれる天国と、私たちの間には大きな隔たりがあるのです。例えるなら、大きな川が流れているようなものです。それはキレイな川ではなく、真っ黒な

私たちの「罪の川」です。このままでは私たちは父なる神様ののもと、天国に行くことは出来ないのです！

けれども、なんと神の御子イエス様がそこに「橋」をかけてくださったのです！ ご自分が、私たちの罪の罰を身代わりに受け、大きな十字架の橋をかけて下さったのです！ もう一度、6節のみことばを読んでもください。

ある人はこんなことを言いました、「イエス様という道を、この泥だらけの足で踏んで渡るなんて申し訳ない」と。でも、イエス様はきつとこうおっしゃるでしょう。「いいのだ。罪に汚れた足のまま、わたしを踏んで父のもとに行きなさい。わたしがその足を洗うのです」と。

まとめ

イエス様は、天国に行くための一本橋です。他の道はありません。あなたはイエス様の道を歩いていますか？ それなら大丈夫！ みんなでイエス様の救いの道を歩いて、みんなで天国で大集合しましょう！ 楽しみですね！

♪まもなくかなたの♪

（新聖歌475、イン107、PW48、ふ57）

聖書 ヨハネ14・1～6 テーマ 道であるキリスト

序論

(福井文彦)

13章から17章は、イエスが十字架にかかられる前になされた最後の語りかけである。これは普通、弟子たちへの「告別説教」と呼ばれるものである。この14章においては、天国と聖霊についての説き明かしがなされているが、どちらもキリスト教信仰の根幹にかかわる重要な部分である。それは、弟子たちの不安と恐れに對して、彼らを励まし力づけ、信仰を保たせるためであつた。

一、心を騒がすな

その時、イエスに対するユダヤ人(特に指導者たち)の反感と敵意、憎悪の念が殺意にまで達していた(5・18、11・53)。そのためイエスの弟子たちも心が騒ぎ、重苦しい不安と恐れの中にあつた。

しかも彼らは、仲間の弟子の中から主を裏切る者が出ることを、イエスから聞かされた(13・21)。さらには、ペテロの失態の予告(13・36～38)と、師と仰ぎつつ従ってきたイエスご自身が、彼らのもとを去って行かれるこ

とも聞かされたのである(13・33)。

これらのため弟子たちはショックを受け、動揺し、不安、心配、恐れのために、心が騒いでいた。そのような彼らに對して、主は「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われ、慰めと励ましを与えられた。

心を騒がせ、動揺することは失敗、敗北への第一歩である。そのことから守られ、不安と恐れからの救いとそれに勝利するために、神を信じ、イエスを信じることを勧められたのである。

二、天国について

イエスが弟子たちから去って行くことは、実は彼らのためであつた。イエスは、弟子たちが神と共にいつまでも住み、神を永遠に喜ぶことのできる道を開くために去って行かれるのである(2)。

イエスはまず天国を「わたしの父の家」と表現された。天国、それは神の家であり、そこには神の臨在があり、神こそがその所有者、その支配者である。神の臨在、その監督のもとに、神のみ心が常に完全な形で遂行される、これが「わたしの父の家」と表現された天国である。

続いてイエスは天国は〈住む所〉であると言われた。〈住む所〉には「モナイ」というギリシャ語が使われ、生活する場所を意味する。そこは一日の労苦から解放され、十分な休息、くつろぎ、安らぎを得ながら、生活するところである。すなわち、天国は一切の労苦から私たちを解放し、満ち満ちた休息、憩いを提供するところである。

イエスは、天国が〈あなたがたのため〉であり、〈場所を用意しに行く〉と言われたように、私たちのための場所であり、イエスによって備えられる場所であると教えられる。そこは地上のような主との別離は全くないところで、私たちをそこに迎え入れるためにイエスが再びこの地上に來られるのである。

三、天国への道

そこで、イエスは弟子たちに〈わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っています〉と言われた。主はどういうお方で、これからどういうことをしようとしているのか、繰り返し教えておられたからである。十字架にかかって死に、3日目に復活して、天に歸られる。そして天に歸られたら、弟子たちのためにその住む所を

用意して、また迎えに来るということである。

しかし、これを聞いたトマスは、よく理解できず、〈主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません〉と質問をした。すると、イエスは〈あなたが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません〉と答えられた。イエスはご自分のみが、一切の解決者であり、救い主であり、父のみもと（天国）への唯一の道であることを宣言されたのである。

人類は罪のために真理を見失って、永遠の滅びに至る人生を歩んでいる。罪人は、イエスを通してでなければ、だれ一人、父なる神のみもと（天国）に行くことができないのである。

結論

イエスは心騒がせ、動揺し、不安と恐れの中にある弟子たちに、天国で主と共に住むという希望と喜びを説き明かされた。さらに、その準備が完了した時に彼らを迎えに来ると約束された（3）。このイエスの約束は、弟子たちに大きな希望と勇気を与え、彼らを大胆な信仰者へと変えていったのである。

研究資料

(宮澤清志)

週題として「道であるキリスト」というテーマが与えられている。信仰者として、キリストが「道」であるという時、それは様々に黙想できる言葉である。しかし同時に教会学校で御言葉を語る者として、キリストが「道」であるという時、まずはこの目標を心にとめておきたい。そして、幼子を前にして、説教者として伝えたいことは山ほどある。しかし、まずはこの目標に立って語り、思いめぐらすことが求められる。

テキスト

1 あなたがたは心を騒がせてはなりません 「心を騒がせる」という言葉は、直訳すれば、心がかき乱されるということである。「騒がせる」というギリシャ語は、他の個所では「不安になる」「惑わす」「おびえる」「うろたえる」等、様々に訳される。

しかし、弟子たちは、なぜ「心を騒がせて」いるのだろうか。弟子たちの身に置き換えて思いを巡らしてみること、また私たちに必要とすることは必要とすることである。ある

注解者は、差し迫ったイエスの死が、弟子たちの心に大きな不安と動揺をもたらせたのではないかと語る。すなわち師との決別である。しかし別の注解者はそれよりもイエスの死を彼の敗北の結果ととらえたために、それが彼らに挫折感を与えたゆえではないかと述べる。神を信じ、またわたしを信じなさい 神を信じるということは、何か超越的な存在として心の中の神の姿に手を合わせることでなく、この後十字架にかかって死なれ、よみがえられた主イエス・キリストを信じることである。同時にこの宣言は、神に対する信仰とイエスに対する信仰とを同列におく、極めて重要な意味を持つ宣言である。

2 住む所 「マンション(大豪邸)」(NIV)。主が私たちのために天にて備えられる住まいは、大豪邸であり、その大豪邸を備えに行くことがキリスト昇天の目的の一つである。あなたがたのために場所を用意に行く イエスの死にどのような積極的な意味があるのかを示す重要な意味を持つ言葉である。イエスの十字架の死とは、この世的にはイエスの無惨な敗北の死である。しかし天的にはイエスは父なる神の御許にお帰りになり、そこで彼を信じる人々を迎え入れるための準備をなさるのであ

る。

3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます この個所は、多くの解釈ではキリストの再臨を指すものと考えられる。しかし、18節との関連から、後の聖霊降臨を指す解釈も可能であるし、また現在私たちとともに住まわれるという理解にも立つことができる(23)。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです わたしがいるところとは、天国のことである。天国とは、神の恵みの支配を指す言葉である。それゆえ天国とは、単純に死後の世界のことではなく、現在神の恵みの支配のただ中にあることである。

4 イエスはかつて弟子たちに「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。」(7・33)と語られた。そればかりでなく、主は弟子たちに繰り返しご自分がどこへ行かれるかを語ってきた。しかし、弟子たちはついに理解することができなかったのである。

5 道 トマスはこの言葉を、ある場所を指す言葉として理解したのであろう。

6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです 前節において「道」を物理的・空間的に理解したトマスに対して、主イエスこそが父の家に達する道であり、ご自身の十字架の贖いと仲保において、神の命にあずかる道を開いてくださったことを示す。そして、自らが「真理」であるとは、イエスご自身が神について、また神と人についての「真理」そのものであり、すべての知識の源は、主を知ることであることを示す。そして、自らが「命」であるとは、イエスご自身がすべての命の根であり、永遠の命の与え主であることを示す。わたしを通してでなければ、だれも父のもとに行くことはできません 主は私たちの天の父に至る唯一の道なのである。キリストを拒絶する時、人はすべてを失う。しかし「父のみもとに行くこと」は、ただ終わりの時のことではない。今この人生において、親密な関係のもとで平安と慰めを得るために父の御許へ行く道でもある。

参考図書 B・F・バックストン「ヨハネ傳講義」(バックストン記念靈交会)、高橋三郎「ヨハネ伝講義」(待晨堂)他

聖書

ヨハネ15・1〜8

タイトル

つながってる？

暗唱聖句

わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。

ヨハネ15・5

目標

キリストにつながり、実を豊かに結ぶ者となる。

導入

(後藤 真)

ぶどうはとてもおいしい果物ですね。甘くて、汁がたっぷりのぶどうは何個でも食べたくくなります。ぶどうが甘くておいしい実を結ぶために、とても大切なことがあるのです。その秘密は何でしょうか。

ぶどうの木

イエス様は弟子たちに言いました。

「わたしはまことのぶどうの木、父（神様）はぶどうの世話をする農夫なんだよ。」

イエス様が住んでいたイスラエルには、ぶどうの木がたくさんありました。弟子たちはすぐに、実をたくさんらせるために、いっしょうけんめいぶどうの世話をしている農夫の姿を思い浮かべました。農夫である神様が

実を結ばせようと世話をしてくださる。自分たちがそんなに大切にされていると思うととても嬉しい気持ちになります。

イエス様は続けて言いました。

「枝がぶどうの木につながっていなければ自分だけでは実を結ぶことができないでしょう。」

「そんなの当たり前だ。切った枝にぶどうの実がなった話なんか聞いたことないぞ。」と、弟子たちは心の中でつぶやいたかもしれません。イエス様はそんな弟子たちの顔を見渡して言いました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。わたしにつながっていないさい。そうしないと、あなたがたは自分で実を結ぶことはできません。でも、わたしにつながっていれば、その人は実を豊かに結ぶようになります。わたしから離れては何もできませんよ。」

弟子たちはきくと、イエス様につながっていたい、実を結びたいと思ったでしょう。わたしたちはどうでしょうか

つながっている？

ところで「つながっている」というのはどういうこと

でしょうか。みんなで手をつないでいるのがつながっているということでしょうか。学校で同じクラスになり、仲良くなったらつながっているということでしょうか。それもつながっていると言えるかもしれません。でも、ぶどうの木と枝がつながっているというのは、そういうことは大きく違います。手をつないでいても、離してしまったりつながらなくなってしまう。同じクラスで仲良くなった友だちも、別のクラスになったらあまり遊ばなくなったりつながりが切れてしまうかもしれません。

けれども、ぶどうの木と枝はいのちがつながっています。ぶどうの木から水や栄養が枝に送られてきます。枝は、木がなければ生きていけません。木から栄養が送られてこなければ実を結ぶこともできません。木から切り離された枝は枯れてしまうのです。

イエス様につながっているというのは、イエス様といのちがつながっているということです。ただイエス様のことを知っているだけではありません。教会に行っているだけでもありません。イエス様を通して永遠のいのちをいただいているということです。また、イエス様を通して神の子とされているということです。

イエス様につながっているなら、イエス様からいつも栄養をいただくことができます。イエス様のことは、聖書のことが、心に響いてきて、イエス様を喜ばせようと思えるようになります。すぐに怒る人が優しくなったり、わがままだったのに人のことを考えられるようになったりします。そして友だちに、この素晴らしいイエス様を教えたくなくなってきます。そういうすばらしい実をたくさん結んでゆくのです。

あなたがたは枝

イエス様は「あなたがたは枝です」と言いました。イエス様はこのことを、弟子たちみんなに伝えたのです。ペテロだけが枝とか、ヨハネだけが枝とかいうわけではありません。枝が一本だけのぶどうの木はありません。一本のぶどうの木にたくさん枝が生えて長く伸び、たくさんの実を結ぶのです。

イエス様の願いは、わたしたちみんながイエス様につながり、実を結ぶことです。みんなでイエス様につながりましょう。そしてイエス様につながっている枝のように、愛し合い、実を結ばせていただきますように！

♪主はぶどうの木♪（リビングプレイズ17）

聖書 ヨハネ15・1～8 テーマ ぶどうの木キリスト

序論

(小泉 創)

新型コロナウイルスの感染拡大で、世の中は変わりました。家族でも友人でも、一緒にいることが難しくなり、親しく食事をしながら時間を過ごすこともしづらくなりしました。以前よりもネットではつながるようになりましたが、それだけでは満たされないことを感じます。人には人が必要なのです。

世の中がどのように変わって行っても、主イエスは変わらずに、私にとどまっていなさい、と声をかけてくださっています。

一、とどまりなさい

主イエスが十字架におかかりになる前の晩に、弟子たちに語られたのは、ご自分がまことのぶどうの木、父なる神は農夫、そしてイエスを信じる弟子たち、つまり私たちは、ぶどうの木の枝というたとえです。木から離れた枝にはいのちがありません。主イエスは「わたしにと

どまりなさい」と、弟子たちに命じられました。一度主を信じさえすれば、あとは何もしなくても大丈夫ということではありません。イエスに対する信仰(信頼)を持ち続ける必要があります。教会にきた時だけ、クリスチャンと一緒にいる時だけ、聖書を読んでいる時だけ、祈っている時だけのことでありません。家庭でも、学校でも、職場でも、クリスチャン同士でない人間関係の中でも、いつでもどこでもかわらずにです。主イエスは、「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」と約束してくださいました。私たちがとどまろうとするとき、主イエスも私たちの中にとどまってくださいなのです。

二、実を結ぶ

ぶどうの木にはぶどうがなります。みかんの木にはみかん、りんごの木にはりんごがなります。キリストが木で、弟子である私たちがつながっているなら、そこには何があるでしょうか。きっとキリストの弟子にふさわしい実があるはずです。それはたとえば「義の実」(ピリピ1・11)、「福音宣教の働きの実」(コロサイ1・5～10)、

「御霊の実」(ガラテヤ5・22〜23)等です。

本来、外に投げ捨てられて枯れてしまうはずだった私たちを、主イエスは救い出してくださいました。尊い代価を払って、滅びの中から買い取られた私たちは、主イエスにつながって実を結ぶ生涯をスタートしたのです。今までこの生涯を歩んでこられたあなたに、主はどのような実を結ばせてくださったでしょうか。感謝をおさげいたしましょう。そしてこれからどのような実を結ばせようとしておられるのでしょうか。主に大いに期待いたしましょう。

三、栄光のために

ひよっとしたら、いつでもどこでも「わたしにとどまりなさい」と言われるのは、窮屈に思うときもあるかもしれません。かつては思うがままに生きることをよしとしていた私たちです。しかし、そのような生き方は私たちにどのようなものをもたらしたことでしょう。手に入れられなかったときには失望を味わい、人をうらやんだり、逆に手に入れたときには高ぶり人を見下げ、それでもなお満ち足りない思いに襲われたりしたのではなかったで

しょうか。

ここに農夫のように愛情をもつて、二十四時間世話をしてくださる父なる神がいっぱいいます。本来ならば何一つできなかった私に豊かな実を結ばせてくださるということです。(何でも欲しいものを求めなさい)と書いていただけるとは、本当に素晴らしいことです。そして私たち自身の満足にとどまるのではなく、神に栄光がさげられるということです。

主イエスは、(あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまっているなら)とおっしゃいました。主の言葉が私たちの内にとどまっていることが大切です。その言葉はどのようなときも私たちを生かし、キリストにふさわしく整えてくださることでしょう。

結論

私たちの中にとどまることを喜んでくださる主に、いつでも、どこでもとどまり続けましょう。そして主の助けによって実を結び、栄光をささげる生涯を歩ませていただきますように。

研究資料

(辻林和己)

ヨハネ15章は、「最後の晩餐」(13・1～30)の後、主イエスが弟子たちになされた説教の一部が記されている。今回の個所はヨハネ福音書の特徴をなす「わたしは…です」(ギ)エゴ・エイミ)の形式の七番目の語句が語られている。主イエスが弟子たちの内におられ、彼らが主イエスの内におることはヨハネ14・20で既に述べられたが、ここではそのことがぶどうの木と枝との関係にたとえられている。

テキスト

1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です 「ぶどうの木」はイスラエルの民の象徴である。詩篇80・8で詩人は、神が民をエジプトの地から約束の地カナンへと導き出して下さったことを回想している。イザヤ5・3～7は、イスラエルが神の願いに反して悪しきぶどうの実を結んでしまったことを告げる。しかし、主イエスは「わたしは(このわたしこそ) まことのぶどうの木」であると語られた。「まことの」の原語(ギ)アレー

スイノス)は、ここでは模型に対する実物を指す意味で用いられている。主イエスこそ神の約束を真実に実現されるお方である。ここでは「わたしは…です」に「わたしの父は農夫です」という言葉が付加されている。主は、父なる神を農夫にたとえられた。

2 すべて、父がそれを取り除き 「取り除く」(ギ)アイロー)を「ぶどうの木の枝を」剪定する(せんてい)と解釈すれば、6節の最後の「さばき」を宣言する言葉と呼応している。これとは逆に原語には「支える」という意味もあり、父なる神が実を結ばない枝を支え、持ち上げてより多くの空気と光に触れさせて下さると肯定的に解釈する説もある。当時のユダヤの国のぶどうは現在の日本のものと違い、地に這わせていた。刈り込みをなさいます 脚注の直訳は「きよくなさいます」。原語は(ギ)カサイローで「きよくする」という意味もある。Iヨハネ1・9の「きよめる」の原語(ギ)カサリゾーは前者の動詞より生じた語形。

3 わたしがあなたがたに話したことは これまでに主イエスが弟子たちに語り続けて来られた言葉。すでにきよいのです 「きよい」の原語は形容詞(ギ)カサロス。2節の動詞(ギ)カサイローとの関連でこの言葉が用いられて

いる。

4 わたしにとどまりなさい 「とどまる」の原語は[メノーで「住む」「存続する」等の意味も持つ。口語訳では「わたしにつながっていなさい」と訳されている。私たちがしつかりととどまるべき場、それはまことのぶどうの木なる主イエスである。この勧めは、わたしに対する信仰(信頼)を持ち続けなさいという主のご命令であり、呼びかけである。枝が幹から流れてくる樹液によって伸び、成長するように、私たちキリスト者は主イエスを通して、神の愛とみことばをいただいて生きる者である。

5 その人は多くの実を結びます 新約聖書で語られている「実」は、「義の実」(ピリピ1・11)、「福音宣教の働きの実」(コロサイ1・5～10)、「御霊の実」(ガラテヤ5・22～23)等。弟子が自分の努力で実を結ぶのではない。実を結ばせて下さるのは主イエス。

6 投げ捨てられ、燃えてしまう枝は、主を裏切るイスカリオテのユダや主イエスを受けない祭司長、律法学者たちの将来を暗示している。

7 何でも欲しいものを求めなさい 「求める」とは父

なる神に祈り求めること。主イエスを信じ、聖霊による主の内住の恵みをいただいたキリスト者(ガラテヤ2・20、4・6、コロサイ1・27等)の祈りは、神の右に座しておられる主イエスご自身のとりなしの祈りと共に父なる神のもとに届けられる。

8 わたしの弟子となることによって 原文では「なる」(ギノマイ)の不定過去接続法が用いられている。主イエスの「弟子である」という状態を表わす言葉ではなく「弟子となる」と、より能動的、積極的な意味が込められた言葉が用いられている。キリスト者は、常に主の「弟子となる」、「弟子となりつつある」存在である。**わたしの父は栄光をお受けになります** 主イエスに従う者がみことばによって主イエスにしっかりとつながり、多くの実を結ぶとき、栄光をお受けになるのは、父なる神である。弟子たちを通して顕されるキリストのみわざの輝きは、父なる神の栄光に他ならない。

参考図書 船本弘毅「ヨハネの福音書」『説教者のための聖書講解』(日本基督教団出版局)、村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解』(いのちのことば社)、他

聖書

出エジプト12・1～14

タイトル

過越

わたしはその血を見て、あなたがたの

ころを過ぎ越す。

出エジプト12・13

目 標

キリストの血により罪赦されて、さばきから守られる者となる。

導入

(後藤 真)

「過越」というのは、ふだんはあまり聞かない難しいことばです。でも、聖書の大切なことばなので、教会に

来ているみなさんにはぜひ覚えてほしいのです。

過越という文字は、「過ぎる」と「越える」という漢字の組み合わせです。ですから過越というのは、何かが越えて通り過ぎることなのです。聖書の物語を通して、そのことを受け止めていきましょう。

エジプトで

イスラエルの人たちはエジプトで長い間奴隷になっていました。元々は、エジプトの王様の夢を解き明かしたヨセフが、エジプトで大臣になり、家族を呼び寄せたのです。それでヨセフのお父さんやお母さんたち、兄弟た

ちや家畜が、カナンの土地からエジプトにやってきて住むようになりました。ところが王様が変わってヨセフのことが忘れられてしまうと、後から起こった王様たちはヨセフの家族、イスラエルの民を奴隷にして苦しめるようになったのです。

イスラエルの人たちの苦しみや叫びを神様は聞いてくださいました。それで、神様はイスラエルをエジプトから約束の土地へ導き出すことを決めました。ところが、エジプトの王様、ファラオは、イスラエルが行くことを許しません。そこで神様はエジプトに災いを下してファラオをこらしめました。それでもファラオの心はかたくなで、イスラエルを行かせませんでした。そしてついに、神様は最後のわざわいをエジプトに下すことにしました。

過越

神様はイスラエルのリーダー、モーセにこれからすることを話しました。それはエジプトのすべての長子、いちばん上の息子を打ち、エジプトの神々にさばきを下すという計画でした。なんと恐ろしいことでしょう。けれども、こうでもしないとファラオはイスラエルを苦しめる

ばかりで、エジプトから出て行かせなかったのです。

神様は、イスラエルの家だと分かるように、家の門と鴨居にいけにえにした羊の血をぬるように教えました。血が塗られている家は、神様が過ぎ越して、滅ばされないと約束してくださったのです。

もちろん神様は門や鴨居に血をぬらなくてもイスラエルの家かエジプトの家か区別できるでしょう。でも、大切なことは、神様がそうしなさいと言ったことをそのとおりにすることです。神様を信じ、神様を頼って、神様のことばに従う。イスラエルの人たちが本気でそうしていることを表すためにも、いけにえの血をぬらなければならなかったのです。

神様はモーセに、この過越の出来事をよく覚え、毎年思い出して祭りをするように教えました。それは、過越が、神様がエジプトからイスラエルを救い出したできごとだったからであり、この神様の他に神様はないことを忘れないためでした。

十字架の血で

わたしたちは、家の門や教会の門に羊の血をぬることはありません。もう、そのようなことはしなくてよいの

です。なぜなら、イエス様が十字架にかかって血を流してくださったからです。イエス様の血は、罪の赦しのしるしです。神様は、イエス様を信じ、イエス様の後を歩いてゆく限り、わたしたちを滅ぼすことはありません。

神様はただイスラエルを救い出すだけではなく、エジプトの王様、ファラオのかたくなな心や、イスラエルを苦しめる力を打ち破りました。またエジプトの神々にさばきを下しました。同じように十字架の血は、わたしたちが滅ばされないためだけのもの、罰から逃れるためだけのものではありません。悪の力を打ち破るものです。

イエス様を信じていても、友達の悪い誘いを断れないと思うことがあるかもしれません。本当はしたくないのに、どうしてもわがままをしたくなることがあるかもしれません。日曜日に遊びに行きたい気持ちになるかもしれません。でも、イエス様の十字架の血は、わたしたちが罪から離れる力を与え、悪の力から守ってくださいます。ともに喜んで、イエス様の道、救いの道を歩んでいきましよう。

♪じゅうじか わが力♪ (ホ115)

聖書 出エジプト12・1～14 テーマ 過越

序論

(小泉 創)

終戦記念日です。世界中に平和が実現することを願ってきましたが、人の中にある罪が、絶えず争いを引き起こし続けています。すべての人が神との平和をいただき、平和を作り出す者となるために、キリストは十字架で血を流し、よみがえってくださいました。十字架の型となる大切なことのひとつが、今日の聖書箇所にある過越です。

一、命じられた準備

エジプトで奴隸となったイスラエルの民をファラオは決して手放そうとはしませんでした。災いが襲い掛かる度に民が出ていくことを認めながらも、災いが過ぎ去るや否やその約束を反故にしました。神は罪びとのかたくなさをよくご存じで、エジプトに与える最後の災いを通して、イスラエルの人々を脱出させられたのです。

最後の災いの準備として、神がイスラエルに命じられ

たことはこのようなものでした。家ごとに傷のない一歳の雄羊を用意すること。そして夕方にほふり、その地をヒソブの束で家の門柱と鴨居に塗ること。夜、いつでも出立できる用意をして焼いた羊の肉を、種なしパンと苦菜と共に食べることに。

これらはのちに神のしてくださいましたことの記念としてイスラエルが祝い続ける過越の祭りとなりました。

二、災いは過ぎ越す

神は真夜中に、災いをもたらされました。エジプト中の長子の命が突然取り去られていったのです。ファラオの長子も、地下牢にいる捕虜の長子も、家畜の長子までもみな打たれて、エジプト中に激しく泣き叫ぶ声が響き渡りました。それは神に反逆し、罪と死が支配する世界の姿にほかなりません。

一方、イスラエルの民はどうだったでしょうか。彼らは神に命じられたように、子羊の血のしるしをつけた家にとどまり、ほふられた子羊の肉を食べ、神のなさることを待っていました。エジプトの全土を襲った神の災いは、それらの戸口に塗られた血をみて、過ぎ越していき

ました。神のもとに身を寄せる恵みと平安があらわれています。

ファラオはこの災いを受けて、ついにイスラエルの民が荒野に出ていくことを認めました。イスラエルは神の力によってエジプトから救い出され、約束の地へと出立することができたのです。

三、神の子羊によって

過越は、イエス様の十字架と深い関係があります。私達もエジプトのイスラエルのように、誰かの支配の中におかれてしまうことがあるかもしれません。そうでなかったとしても、すべての人は罪の奴隷として悪魔の支配下におかれ、神から遠く離れています。その支配下から脱出の道を備えてくださったのが、「神の子羊」キリストの十字架です。

バプテスマのヨハネは、イエス様とお出会ったときに「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」（ヨハネ1・29）と告げました。イエス様が十字架におかかになったのは、過越の祭りを前にしてエルサレムに人々があふれているその時でした。黙示録の中でも、イエス様は天にお

いて「屠られた子羊」として描かれています（黙示録5・9）。罪なきお方が犠牲となり、罪と死におびえる者を救い出す道を開いてくださいました。

私達も災いの只中におかれることもあるかもしれません。罪と死の力に襲い掛かれることもあるでしょう。しかし神の子羊キリストの十字架を信じるならば、主が流してくださいました血潮によって、平安をいただくことができるのです。

結論

私たちのために、屠られたキリスト、災いを過ぎ越す恵みを与えてくださった神に感謝しましょう。キリストの十字架の贖いを信頼し、どのような時にも神の内にとどまり続けましょう。

研究資料

(小平徳行)

過越の出来事はイスラエルの歴史においても、後のキリストによる救いの型を示している点においても非常に重要である。

テキスト

2 この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ この出来事はイスラエルの歴史において非常に重要なものであったので、特別に霊的な意味において「最初の月」とする必要があるが、日常の暦では、おそらく第七の月であったと思われるが、過越と出エジプトという重大な出来事を記念して、この日がイスラエルのために特別な意味を持つようになった。この時以来、イスラエル人は宗教暦と民事暦の二つの暦を用いるようになった。この月はまた「アビブの月」とも呼ばれる(出エジプト13・4、申命記16・1)。「アビブ」とは「穀物の穂」を意味し、この月はちょうど穀物が穂を出す頃で、太陽暦の4月頃に相当する。バビロニア捕囚の後、この月はバビロニアの習慣に従って「ニサンの月」と呼ばれるようになった(ネヘミヤ2・1、

エステル3・7)。

3 全会衆(⌋コル・エーダー) イスラエルを表す宗教的用語。エーダーはカーハールと共に、新約における教会(⌋エクレーシア)のもととなった用語。羊(⌋セ)は羊または山羊の両者に用いることができる。それゆえ5節では「子羊かやぎのうちから取らなければならない」と説明されている。

4 一人ひとりが食べる分量に応じて 後代になると、一頭の子羊を食べる人の数は10人と定められるようになった。これはユダヤ教による人工的规定であって、実際にはそれぞれが食べられる分量に応じて人数と分量を定めればよかった。

5 傷のない(⌋ターミム) この語はレビ記の祭儀律法の中で多く用いられており、身体に欠陥のないことを意味する。また、人についても用いられ、「全き人」「全き者」と訳されている(創世記6・9、17・1)。この場合には「神に全く従う」という意味に用いられる。過越の子羊はキリストの型で(Ⅰコリント5・7)、傷のない、完全無罪のキリストがその血を流されたことによつて贖い^{あがな}が完成した。

7 その血を取り、…塗らなければならない この行為は、ヒソプの束を用いて行われた(22)。ヒソプはきよめの行事に関連してのみ用いられる(レビ14・49～52)ので、この行為は、きよめと贖いの儀式に関連している。

8～10 ここは食事について具体的に指示されている。火で焼いて…食べなければならない 生で食べることや、水で煮て食べることが禁じられている。火で焼くことの中に、神の聖なる裁きの火に、ご自身を完全ないけにえとしてゆだねられたキリストの御姿を見ることができる。過越の時に一つのパンから食するように(1コリント10・17)、子羊もその体のまま食卓に供された。それは主にある者が一つ心になって交わることができるようになるための象徴的な行為である。種なしパン パン種を入れたパンは腐敗しやすかった。それは道徳的腐敗を象徴しており、悪意と邪悪の型でもあったので(1コリント5・8)、ささげ物のパンはパン種を入れて作ることが禁じられた。苦菜 エジプトにおける苦難を表したものの。「ミシユナー(ユダヤ教の中で最も初期に成文化された口伝承)」には苦菜にする草として、チシヤ(レタス)、キクチシヤ(チコリー)、コシヨウグサ、ヘビノネ、タン

ポポの5種類が挙げられている。

11 腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、急いで食べる いつでも出立できる身なりをして食するということで、緊迫した雰囲気がよく表されている。後代になると、自由の民であることを表すため、ゆつくりした雰囲気の中で食するようになった。過越(ヘパサハ) 文字通りには「跳躍する、飛び越す」を意味し、ここから「通り越す、容赦する」という意味をもつようになった。

13 その血は…しるしとなる 家の門柱と鴨居^{かもい}に塗った血が、神のさばきより免れるしりしとなったように、私たちも神と人の前にキリストの血に対する信仰を言い表わす時に救われる。

参考図書 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約1』(いのちのことば社)、レオ・G・コックス「出エジプト記」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇1』(イムマヌエル綜合伝道団)、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、C・H・マッキントシ「出エジプト記講義」(伝道出版社)、他。

聖書

出エジプト14・10～27

タイトル

神様、助けてください！

暗唱聖句

しっかりと立つて、今日あなたがたのため
に行われる主の救いを見なさい。

目標

出エジプト14・13
難しい状況の中でも助けてくださる神に
信頼する。

導入

(飯田勝彦)

「あーあ、どうしようかなー」。

皆さんは今、何か悩んでいることや困っていることは、ありませんか。毎日を過ごしていると、思いがけないことがたくさん起こります。そんな時、心が暗くなったりため息を付いたり、何もやる気が起こらなくなったりすることがないですか。元気な時やすべてが上手く行っている時には、神様のことを思い出しても、苦しくなると逆に神様のことを思い出せないことがあります。イスラエルの人たちもそうでした。

もう、ダメだ！

イスラエルの民は、奴隷として苦しめられていたエジ

プトから脱出することができました。神様は、そのために超越するという素晴らしい御業をされましたね。彼らはモーセをリーダーとして神様の約束されたカナンの地を目指して進んで行きました。そして、主がモーセに言われた場所で宿営したのです。そこは海に面したところでした。イスラエルの民は、急いでエジプトから出て来たので、ここで一息入れることが出来たでしょう。

すると「ドオー！」という地響きが聞こえて来ました。

「何だ何だ、地震か」と思い、ふと後ろを振り向くと何とエジプト軍が追いかけて来ていたのです。びっくりしたイスラエルの民は、いざ逃げようと思いますが、前は海で行き止まりです。「もうダメだ！」と皆が思ったでしょう。皆さんも今までに「もうダメ」と落ち込んだり、あきらめたりしたことがありますか。私たちの生活にはこのようなことが何回も起こります。でも、大丈夫です！神様は不思議なように皆さんを守ってくださいます。

神様は、助けてください！

絶体絶命の中、イスラエルが言った言葉は「神様助けて！」ではありませんでした。彼らは、神様に対する思いをモーセに対してぶつけました。それは不平不満でし

た。「エジプトには、俺たちの墓がないから、あえてここで死なせるために、エジプトから連れ出したのですか?」。皆さんなら何と言いますか?

イスラエルは、エジプトでも災いから何度も守られて来ました。そして、いつも雲の柱や火の柱によって、神様が共にいることを知ることができていました。それなのに、いざという時、神様に助けを求めることができなかったのです。

でも、民の不満を聞いたモーセは、さすが神様から召されたリーダーです。彼は慌てることなく「落ち着きなさい。今日、神様は必ずあなたたちを救ってくださる!」と言いました。モーセは、「神様は、助けてくださる!」と確信していたのです。

神様、感謝します!

絶体絶命の中、神様はどのようにイスラエルを助けてくださったでしょうか。神様はモーセに「杖を上げ、手を海に向かって差し伸べると海が分かれ、そこを渡るこ

とができる」と言われました。「えっ、そんなこと!」と思うでしょう。でも、モーセは神様の言葉を信じて実践しました。するとどうでしょう。「ゴォー」と強い風が吹き始め、海は2つに分かれたのです。そして、イスラエルは皆、分かれた海を渡り、向こう岸に着くことができました。エジプト軍は、後を追って海を渡り始めました。でも、モーセはもう一度、手を海に差し伸べたところ、海の水はもとに戻り、エジプト軍はみな死んでしまったのです。イスラエルの民は、絶体絶命のところから救われました。民は、モーセが言った通りに神の助けを体験したのです。

このことによって、民は主を恐れ、主とモーセを信じるようになりました。そして感謝の歌を神様にささげました。

まとめ

イスラエルをあざやかに救われた神様は、皆さんと共におられる神様と一緒です。そして、どんな時にも神様は皆さんを助けてくださいます。それは、私たちが考えられないような方法でなされる場合もあります。ですから、もし苦しいことがあれば神様を信じ「神様、助けてください」と叫んでください。その叫びは、必ず「神様、助けてくださり感謝します!」に変えられます。

♪歌いつづけよう 主のあいを♪(ホ77)

聖書 出エジプト記14・10～27 テーマ 海を渡る

序論

(石田高保)

きょうの箇所は、紅海が二つに分かれてイスラエルの民がエジプトの奴隷から解放された出来事です。

一、神様の圧倒的な力

今から三千五百年ほど前、モーセはエジプト王にイスラエルを解放せよと迫りましたが、素直に応じられるわけもなく、結局10回の災いを神様に下していたなかなかねばりませんでした。その結果、何百万というエジプトの民が塗炭の苦しみを味わうことになりました。極めつけは過ぎ越しの夜、御使によってエジプト人の長子のみな殺された出来事です。それはエジプトの王子も例外ではなく、国中に死人の出ない家はありませんでした。頑固な王もさすがに音を上げ、ついにイスラエルを去らせることを決意します。ところがイスラエルが去ってしまふと、王は心を翻^{ひるがえ}して彼らを取り戻そうと全軍を率いて追いかけてきました。そしてついに海辺に宿営しているイスラエルを追い詰めます。前は海、後ろはエジプト軍

でイスラエルは絶体絶命です。民は恐怖と絶望からモーセに食って掛かります。われわれを殺すために導いたのかと。すると神様は、〈主があなたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい〉とモーセと民を励まします。私たちもときに何か問題が起きると、すぐに解決させようとして焦ります。もちろん時を置かずに行動を起こすべき時もあるでしょう。しかしすぐに行動を起こさないほうがよい場合もあります。祈りの内に主を待ち望み、主が私たちの代わりに働いて下さるのを待つのです。たとえば人間関係の場合などに適用できるのではないでしょうか。

さて神様はモーセに語られました。目の前の海に手を伸ばせば海は二つに分かれ、イスラエルは海の中の乾いた道を歩いて向こう岸に渡ることができると。彼らの前に進んでいた御使は彼らの後ろに移動し、雲の柱も同じように後ろに回り込みました。そのおかげでエジプト軍はイスラエルに襲いかかることはできなくなります。そして神様に言われたとおり、モーセが手を海に向けて伸ばすと、主は一晩中、強い東風で海を押し戻し、海は二つに分かれ、その真ん中を乾いた地とされました。イスラ

エルは海の底をとおって逃げて行きます。海の水は彼らの両側に壁となりました。エジプト軍も後を追って海の中を進みイスラエルを襲おうとします。そこで主はモーセに言われました。〈あなたの手を海に向けて伸ばし、エジプト人と、その戦車、その騎兵の上に水が戻るようにせよ〉。すると海は元に戻り、エジプト軍は水に吞まれて一人も生き残りませんでした。エジプト王は神様に向かって心を頑なにしたこと代償は小さくありませんでした。祈ったり考えたり相談したりしないでわが道を行くと、空回りすることがあります。いっぽうイスラエルは主がエジプト軍に行われたこの大なる御力に圧倒され、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じました。

二、神様の造り変える力

この出来事は、神様に従って行くなら間違いのないことを私たちに教えています。たとえば思い煩ってはならない、さばいてはならない、自分を愛するように隣人を愛せよ、などは疑問の余地がありません。いっぽう言葉にはつきり示されていない場合は、聖書全体がどう言っているかを思いめぐらすといでしょう。

このエジプト脱出の出来事は、イスラエルの子孫に連

綿と語り継がれ、過越しの祭りで毎年確認し続けました。奴隷であったところから解放されて、神の民として選ばれて今日あることを記念し続けたわけです。しかし二千年前、イエス様が現れ、十字架にかかって人類を救う道を開かれたとき、過越しの祭りは必要なくなりました。なぜなら過越しの小羊は、究極にはイエス様のことを指し示しており、主が十字架であがないを成就したとき、過越しの祭りはその役目を終えたからです。

また海の中の道をとおって解放されたことは、水の中をくぐったことにより、洗礼、バプテスマを指し示しています。その出来事は私たちの罪が贖われて、キリストにある新しい人に変えられたことを意味しています。洗礼それ自体に効果があるわけではなく、それで救われるわけでもありません。しかし洗礼の意味するところは、それまで生きていた古い人がキリストと共に葬られ、キリストにある新しい人として生まれたことにあります。

結論

クリスチャンは良い人である前に新しい人です。そして内なる人は日ごとに新しくされてゆきます。新しくされた自分を喜びましょう。

研究資料

(小平徳行)

背後に迫るエジプト軍と前方に立ちはだかる海に挟まれて、イスラエルは絶望的な状況に追い込まれた。しかし、これは神がご自身の栄光を表すために、許されたことであった(8節)。危機は神の恵みと御力の表される機会である。

テキスト

10-12 ファラオは間近に迫っていた。イスラエルの子らは大いに恐れて、ファラオの軍隊を見た時のイスラエルの反応は、非常な恐れであった。11-12節はイスラエルの人々の陥ったパニック状態と絶望感を表している。「荒野で死なせるために、あなたはわれわれを連れて来たのか」と不信仰は常に、神に照らして困難を解釈するのでなく、困難に照らして神を解釈するように誘う。この時イスラエルは、直前に過越を経験していたにもかかわらず、現在の状況だけによって霊的状态が左右されていた。彼らがどのような中から救われたのか、神が過去にどのようなみわざをなして下さったのかという

歴史的な考察に欠け、さらには神は何をなして下さるかという神への深い信頼に基づく信仰も欠けていたのである。このような状態では、信仰は容易に動揺させられてしまう。困難が私たちの心と主との間に入り込む時にはいつでも、主のご臨在を喜ぶことはできず、直面する困難の前に苦しんでしまうのである。信仰は、困難の背後に神がいますことを認め、神が、真実さ、愛、力のすべてをもって共におられる事を知ることである。

13 しっかりと立って 試練に会った時に信仰が最初となる態度である。イスラエルの狼狽(うろは)に対してモーセの確信の姿は際立っている。彼は主がイスラエルを救われる事を確信していた。救いを見なさい 救いとは神によって完成され、啓示されたものであり、私たちが見て、喜ぶべきものである。

14 【主】があなたのために戦われる 申命記において繰り返し語られている(申命記1:30、3:22、20:4)。そこに常に共に言われているのは「恐れてはならない」ということである。恐れず主に信頼して進む時、主は私たちのために戦ってくださる。ただ黙っていないさ 信仰生活の大切な要素は、主に信頼し、主の前に静

まり、耐え忍んで主を待ち望むことである。

15 **なぜ、あなたはわたしに向かって叫ぶのか** 叫びの内容は記されていないが、モーセ自身の中にも動揺があったことを示しているのかもしれない。**前進するように言え** 恐れに満ちた祈りをやめ、信仰によって前進すべき時であった。

16 **あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に伸ばし、海を分けなさい** 前進せよという命令と同時に、恵みによる助けも来た。神の御手は、私たちが第一歩を踏むために道を開いてくださる。

19 **神の使い** 実際に人々の目に見えたかどうかかわからないが、雲の柱が彼らの前から移動して、彼らのうしろに立ったことによって表された。超自然的でありつつ、人格的な臨在によって神はイスラエルを守られた。

20 **それは真つ暗な雲であった** 直訳すれば「そこに雲があり、暗やみがあつて夜を照らした」となる。通常、雲の柱は昼の¹³ため、夜は火の柱となるが（出エジプト13・21）、この日の夜は火の柱ではなく、光のない雲の柱がイスラエルの後方に移り、エジプト軍との間をふさいだ。この柱はエジプト軍には暗やみをもたらしたが、イ

スラエルには光であつた。

21 **強い東風** 東風は強風の代名詞であろう。これは超自然的な風であり、東から吹いてきたわけではないと主張する人もいる（J・J・デーヴィス）。この風の結果、海は陸地となるが、22節のように水が「右も左も壁になった」現象を説明することは難しい。さらに、このように海の水を二分するほどの強風の中をイスラエルの人々が²⁵行進することができたことは不思議である。

25 **【主】が彼らのためにエジプトと戦っているのだ** エジプトの陣営が混乱に陥り、戦車の車輪が外れて動きが阻まれたことは、主がなさったこととして書かれているが、エジプトの兵士たちも、これらの出来事の中に、主の力を認めていた。

26-27 エジプト軍は、イスラエルの人々の進んだ道を歩むことはできなかった。神がご自身の民に歩むように命じておられる道は、肉では決して歩めない道である（Iコリント15・50）。信仰のみが私たちに神の道を歩ませることができるのである。

参考図書 8月15日分と同じ。

聖書

出エジプト16・31〜36

タイトル

神様を信頼して歩もう！

暗唱聖句

イスラエルの子らは、人が住んでいる土地に来るまで、四十年の間マナを食べた。

出エジプト16・35

目標

神による養いと守りがあることに信頼して生きる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、どんな人を信頼しますか？ 自分のことを真剣に考えてくれる人。自分の話をしっかり聞いてくれる人。自分を励ましてくれる人など。

信頼できる人が側にいると勇氣も出るし、心の支えにもなります。神さまは「私を信頼して欲しい。」「私はあなたの味方です。」「私を信頼しても大丈夫だよ」と声をかけてくださいます。嫌なことや「えっ、なんで！」と思うようなことがいっぱいある生活ですが、神様に信頼できる恵みを一緒に確認しましょう。

民のつばやき

先週は、エジプトから脱出したイスラエルの民が追っ

て来るエジプト軍から不思議な神様の守りを体験したことを見ました。もし、皆さんがイスラエルの民だったら神様にどんな気持ちになりますか？

「神様、私を守ってくださいって感謝します！ 一生このことは忘れません。これからもあなたに従って行きます」と告白し感謝を現わすのではないでしょうか。実際、15章を見るとイスラエルの民は神様に対して感謝の歌を歌いました。この歌は大合唱となって周辺に響き渡ったことでしょう。

でも、エジプトを出てシンの荒野に入ったとき、彼らの口から何と不平が出てきたのです。神様への感謝の唇が一変して不平の唇となってしまったのです。これを私たちが責めることができますか？ 私たちも良いことがあれば「神さま、やっぱりあなたしかいません」と言いながら、何か悪いことや、思い通りにいかないことがあると「神さま、あなたは何でもできる神様でしょう。何をやっているんですか？」と神様に不平を言ったことありませんか？

神さまの養い

不平で満ちたイスラエルの民に、神様は天からのパン

を与えられました。神様はイスラエルの民を見捨ててるとはされません。どうしてでしょうか？ それは神様が選んだ民だからです。そして、神様はアブラハムに約束されたことを守っておられるのです。それは、神さまの祝福がイスラエルを通して広がって行くためです。

神様はイスラエルの民がどんなに弱く、自己中心であつたとしても民を滅ぼすことはされません。逆に彼らの必要を満たすために、不思議なように天からパンを降らせたのです。そのパンは約束の地には入るまで降り続けました。神様は忍耐強く、イスラエルに寄り添って彼らが飢えることがないように養いました。

このパンは、今の私たちに對しては、み言葉ということができます。「それで主はあなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖たちも知らなかったマナを食べさせてくださった。それは、人がパンだけではないのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということを、あなたに分からせるためであつた」(申命記8・3)とあります。私たちの心には聖書のみ言葉が必要です。心が貧しくなると、自分や人を責めたり、生活が乱れたり、悪い行動をするようになったり

します。でも、み言葉に養われるならいろんな悩みや問題があつても、それを乗り越える力が与えられます。また、マナはイエス様です。「わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下つて来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。わたしは、天から下つて来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。」(ヨハネ6・48～51)。

私たちはイエス様を信じ、み言葉と祈りを通してイエス様の内に留まり続けることで、イエス様の豊かな命に養われます。

まとめ

神の恵みを忘れて不平を言うイスラエルの民でさえ、神様は見放さず不思議な方法で養われました。この神様は、私たちの神様でもあります。私たちの必要を知り、今もみ言葉と聖霊の助けによつて養い続けてくださる神様が共にいてくださることは何と幸いでしょうか？

決して変わることはない愛をもつて励まし支えてくださる神様をこれからも信頼して歩みましょう。

♪神さまあなたは♪(ホ52)

聖書 出エジプト記16・31〜36 テーマ マナ

序論

(石田高保)

荒野でマナの降った出来事によって、神様が天の父として神の子どもである私たちを、見えるところ見えないところで切れ目なく配慮しておられることが見られます。

一、からだへの配慮

イスラエルは神様への不従順のために荒野で40年間さまようことを余儀なくされました。それはあまりに厳しすぎると思われる処置ですが、そのいっぽうで神様はイスラエルの民およそ二百万人を毎日養って気づかうことを忘れませんでした。シナイ半島の荒野は乾燥が激しく、草木も生えない世界が延々と続いています。農耕などはないのもありません。そういう環境で生き延びられるのはわずかな人間と家畜だけでした。とうてい二百万人のイスラエルが数日でも生き延びるのは不可能です。しかしそれを可能にしたのは神のご配慮以外あり得ません。彼らはみずからの不従順の実を刈り取るようにして荒野で40年間堂々巡りをしたわけですが、神様は彼らが

飢えることがないようにマナを降らせ続けなさいました。

そもそも神様がマナを降らせることになったきっかけは、エジプトを出て2か月半目、荒野でひどい思いをするくらいならエジプトで死んだほうがよかったと民が不平を募らせたことでした(3)。その時から神様は夕方にはうずらを呼び寄せ、朝にはマナを降らせ、一日でも飢えることがないようにし、それをカナンの地に入るまで40年間続けました。神様は6日間マナを降らせ、6日目には7日目の分と一緒に2日分降らせ、7日目には降らせませんでした。それは7日目安息日で、マナを集めるという労働も休まなければならなかったからです。ですからその日に集めようとしても見つかることはできませんでした。また沢山集めた人も、少ししか集められなかった人も、家族で分け合ったら全員満腹しました。

ここには神の子どもたちを一日も欠かさず養おうという天の父の姿を見ます。私たちは肉体的にも物質的にも完全に神様に依存しています。マナもうずらも民が努力したから得られたのでは決してありません。文字どおり天から降ってきたものです。私たちの口にする食物も、

人の手を経ているとはいえ、元をただせば天から降ってきたものと言えます。神様は私たちの霊のことばかりではなく、からだのこと、物質的なこと、生活全般にわたって深く配慮しておられます。

二、霊への配慮

イエス様は「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません」(ヨハネ6・35)と断言されました。これはマナの個所に対する最高の注解です。イスラエルに降ったマナは実際の食べ物ですが、イエス様は天から下ってきて、この世に命を与える「神のパン」です。天からのマナ、神のパンとは、み言葉なるイエス様ご自身のことです。これを食べるといことは、イエス様を心の拠り所とし、イエス様に聴いて従ってゆくことを意味します。具体的には説教や聖書通読によってみ言葉を自分の生活に当てはめ、聞いたみ言葉を行動に結びつけることです。また聴くだけで終わらないために、ほかのクリスチャンとみ言葉を分かち合って互いの生活に適用してゆきましょう。神様は私たちのからだのことだけでなく、私たちの霊

について深く配慮しておられます。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」(マタイ4・4)とは、み言葉であるキリストを食べることによって、私たちが生活の現場で世の光、地の塩という主の力ある証人として生きるためでしょう。自分の養われることばかりを求めているとは十分ではありません。自分が養われつつ、他のクリスチャンや未信者の人を養うことが神の目的です。み言葉を聴いたり学んだりするだけではなく、それを家庭や職場や学校や身近な関係で実践するならば、私たちは自分のものではない神の国の影響力を及ぼすことができます。まずは自分がクリスチャンであることをできるだけ早いうちに開示しましょう。そして聖書の価値観を語り合う中でお分かちしましょう。そうすればこの世にはない別の世界の雰囲気にはひきつけられる人が起こされてきます。人々は神なき荒野の世界で神の国のマナを潜在的に求めているのです。

結論

神様は天の父として私たちを養わないではおれない方ですから、いつさいの必要を祈り求めてゆき、神の言葉で生きてゆきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

先々週より、モーセの生涯を追いつながらの礼拝が続いている。本日の箇所は、食料(マナ)と信仰に関わる出来事である。というより本章全体が食料と信仰とに関わる事柄である。

新聖書大辞典は、この章の物語のもつ意味を

(1) イスラエルの大群衆の食用に足るほどの大量であったこと。

(2) 採集した分量が奇跡的に均等であったこと(16・18)。

(3) 安息日の分(その前日に集められた2日分の量)は腐敗しなかったこと(16・23)。

(4) その1オメルは「あかしの箱の前」に置かれて永久保存に耐えたこと(16・33)。

とまとめている。

さて、マナについてはむしろ14〜30節の方が詳細に述べられている。では、31節以降の物語の中心点は何か。それは、この経験が、イスラエルの民にとっては「記念」とされるべきであるということにある。14〜30節が、マナの出来事そのものに重点が置かれたのに対して、この

箇所は、主は40年に渡ってイスラエルの民を養い、更に主の臨在のあるところどこにおいても主は私たちを養い続けて下さることが語られるのである。

なお、イエスは肉体の食物としてのマナの限界性を示し、ご自身を「天から下ってきた生けるパン」と語られ(ヨハネ6・49) たことも、同時に黙想しておきたい。

テキスト

31 詳細については13〜21節にも記されているので、そちらを併せてお読み頂きたい。また民数記11・4〜9にも関連した記事がある。そちらにも目を通していただきたい。**マナ** ヘブル語は「マン」であるが、「マナ」とは、七十人訳聖書に由来している。マナの起源については明らかではないが、語源的な説明では、「これは何だろう」(16・15)からきたとされている。この言葉は、同時に「これはマナである」と訳すこともできる言葉である。後のイスラエルの人々は、このマナを知らなかった。そのために、入念な描写がなされているのであろう。**コエンド** □ セリ科の植物で、初夏に白い花をつける。香辛料としても広く用いられている。エジプトでは、コエンドロ

の種も用いていたので、イスラエルの民もよく知っていたことであろう。

これらの特徴から、「マナ」は、アラビア語の「マン」とおおよそ結論づけられている。これは、ぎりぎりの樹に生息する虫が出す排出物ではないかと推測されている。今日でも、6月盛夏には、ひとりで一日1kg集めることができるという。しかし、その実際の特徴が何であれ、神はこの不思議な出来事を、荒野を放浪した全期間、イスラエルの民に与えられたことを私たちは感動をもつて伝えたい。

32 **33** イスラエルの民は、神が不思議な方法で、彼らを荒野の旅の間中養われ、導かれたことを記念し、覚えるために、このマナを壺に入れて保存するようにと命じられたのである。この荒野の旅は、神の恵みによってエジプトでの奴隷状態から救い出され、約束の地カナンへと導かれた旅であった。

32 **オメル** 「麦の一束」の意味で、1束の脱穀量から来た固体量の単位。1エパの10分の1（36節）で、約2.2リットル。日本の一升ますのように、各家庭にはその容器があった。

33 **壺** ここだけに用いられている言葉である。聖所について述べられているヘブル9・4には、このつばを「金の香壇」（口語訳）と記述しているが、これは七十人訳聖書によるものである。実際にこの壺が金であったかどうかは定かではない。**【主の前に】** 具体的には「さとしの板の前に」（34）ということ。この場所におかれる目的は、未来の子孫のために保存されるということであった（32）。この、主の前に置かれた一日分の1オメルのマナは、永久に腐ることはなかった。

34 **さとしの板** 神の意志を表現するものとしての十戒（あかしの板）を納めてあったためにこの名が付けられた。シナイ山で、主がイスラエルの民との間に結ばれた契約を思い出させるしるし、あかしの品として、モーセに与えられたものである。

35 神は、イスラエルの人々がカナンの地にはいるまでの40年にわたって民の必要に応じてマナを不思議な方法で与え続けた。これは、驚くべき神の奇跡である。

参考図書 R・アラン・コール『ティンデル聖書注解「出エジプト記」』（いのちのことば社）他

聖書

出エジプト17・8～16

タイトル

祈りの手

暗唱聖句

モーセが手を高く上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を下ろすとアマレクが優勢になった。

目標

出エジプト17・11
祈りの重要性を知り、心を合わせて祈る者となる。

導入

(土屋開夫)

九月になりました。また新しい気持ちでイエス様を礼拝しましょうね。イエス様につながっていると、私たちは勝利の人生を歩めるのです！

さて、今は出エジプト記を開いています。イスラエルの人たちがエジプトでの奴隷から救われて約束の地を目指すストーリーは、罪から救われて天国を目指す私たちのストーリーと、とてもよく似ています。

さて、その天国を目指す「信仰の旅」で、とっても大事なものが二つあります。

一つは先週学んだ「天からのパン（マナ）」、聖書のみ

言葉です。そして二つめは今日学ぶ「お祈り」です。

「み言葉」と「お祈り」、この二つはちょうど自転車の前輪と後輪のように無くてはならないものです。

(前輪は進む方向を導き、後輪は進む力を与えます。)

「お祈り」とは

さて、「お祈り」というのは、父なる神様にお話することです。親しく何でも祈ればいいのです。でも、特に必死に祈ることが必要な時があります！ それはピンチの時です。「お父さん、助けて！」と。「信仰の旅」というのは、そういうピンチや戦いの時が結構あります。でも大丈夫。そのためにこそ「お祈り」があるのです！

戦い

旅を続けるイスラエルの人たちにも、早速ピンチがありました。アマレク人たちが旅の行く手を邪魔し、戦いをしかけてきたのです！

(※旧約時代は、人を敵として戦うことがありました。けれどもイエス様が来られてからの新約時代では、人を敵として戦うことはしません。)

ずっと奴隷だったイスラエルの人たちは、戦い(実戦)などしたことはありません。きっと相手の方が戦い慣れ

ていて、強い武器も持っていたかも知れません。どう考
えても勝つのは難しい状況です。

けれども大丈夫！ こっちには、この天地を造られ、
支配しておられる、本当の神様がっているからです！

「お祈り」とは、私たちには出来ないような難しい事
でも神様には出来る、と信頼してお願いすることです！

ヨシユアさん達が敵と戦っている間、モーセさんは手
を天に挙げて（たぶん両手）、イスラエルが勝つように神
様に必死に祈りました。何時間も祈り続けました。

するとだんだん祈り疲れてきました。「ちよつと休憩
：」と思って祈りをやめると敵が勝ってきました。「い
かんっ」と思って、また慌てて祈り始めるとイスラエル
が勝ってきました。アロンさんとフルさんが右と左で手
を支えたので、モーセさんは最後まで祈り通すことが出
来ました。一人で祈るより、二人、三人で祈る方がよく
祈ることが出来るのです。そうして、遂に勝利しまし
た！

信じて祈る

皆さん！ 今日のお話を、昔話を聞くように「へー…」
と聞いているはいけませんよ。これは真実の話です！

つまり「お祈り」というものは、なんとなく、テキ
トーに、口先だけで祈っていてはいけません。「お
祈り」は信じて祈らなければ、全く意味がありません。

イエス様は「お祈り」について繰り返し、繰り返し、
教えられました。「あなたがたが祈り求めるものは何で
も、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおり
になります」（マルコ11・24）。

「父なる神様の御心ならば、この祈りはどんなに難し
くても必ずかなえられる！」と、不可能を可能に出来る
神様を信じて祈ることです！ それがとても重要です。

先生もある時から、自分の祈りが不信仰だったことを
悔い改めて、「信じます！」と告白するように力を込めて
祈るようにしました。そうすると色んな祈りが前よりも
どんなかなえられるようになりましたよ。

まとめ

信仰の旅にはピンチや戦いもありますが、みんなの事
をものすごく愛しておられる、お父様である神様に祈れ
るのですから大丈夫です！ もっともつと信じて、どん
どん祈り続けましょう！

♪明日に向かいチャレンジ♪（PW 58）

聖書 出エジプト記17・8・16 テーマ 祈りの手

序論

(石田高保)

アマレクとの戦いは、クリスチャンにとって霊的戦いと解釈することができます。その相手は人間ではなく、悪の霊に対する戦いです(エペソ6・12)。その備えとして神の武器で身を固めるように命じられていますが、その最後に祈りが強調されています。

一、霊的戦いの必要

ここはイスラエルにとって初めての戦争です。出エジプトの際、エジプト軍と戦争したとは言えません。なぜなら神様がエジプト軍と戦われるのを傍観していただけだったからです。また出エジプトの際、神様はペリシテとの戦争も回避されました。まだイスラエルには戦う訓練ができていなかったからです。しかしこのたび神様はアマレクがイスラエルを襲うのを許され、イスラエルがこれに戦うようにチャレンジしました。それはイスラエルもやがてカナンの民と戦って、約束の土地を勝ち取るために慣らししておかなければならなかったからでしょ

う。当時の容赦ない弱肉強食の世界で生き残るためには神の民も戦争によって強くなる必要がありました。またイスラエルは荒野で水のことや食料のことで不平不満をたびたび募らせ、モーセと神様に食って掛かることをなかなかやめようとしませんでした。このようなときアマレクが襲ってきたことは、イスラエルにとっては降って湧いたような災難です。しかしアマレクとの戦争はイスラエルが自己愛的消費者マインドとも言うべき幼い状態から、自立した大人の貢献者として一皮むけるためにも必要だったのでしょう。私たちも試練が来ると祈りに真剣度が増し、よりリアルなものとなるのではないでしょう。か。「順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ」(伝道7・14)。

二、霊的戦いの実際

イスラエルはアマレクが襲ってきたためにやむなく受けて立つわけですが、モーセの考案した戦術は、ヨシユアを総大将にし、自分は神の杖を取ってアロンとホルを連れて丘の頂に登り、祈りに専念することでした。そしてアロンとホルはモーセの手が下がないように支え続けます。それはモーセの手が下がるとアマレクが勝ち、

手が上がるとイスラエルが勝ったからです。実に奇想天外な戦術です。背後の祈りによって戦争の勝敗が決せられるとは、古今東西、まず見ることでできない兵法でしょう。見えない神のお働きを見えるように知ることのできる出来事です。

翻^{ひるがへ}って私たちの霊的戦いはどうでしょうか。無勝手流という剣術もありますが、武道であればたいい型から入るものです。祈りにおいてもいちおうの型はありますが、自分の体質に合った型をつくればよいでしょう。特に霊的戦いのための祈り、つまり誘惑に打ち勝つための祈りは、それに弱い霊の領域を見極めることから始まります。悪魔に付け入る機会を与えてはいないか、依存症的な習慣はないか、誰かを赦さないでいることはないか、密かに誰かの不幸を願っていることはないか、誰かに怒りを燃やし続けていることはないか、など。そのままにしておく^{おと}と悪魔の狙うスキを作ってしまう。それを見極めたら正直に神に告白しましょう。自分の力で克服できませんから、助けてくださいと祈りましょう。それを十字架につけて手放す祈りをしましょう。またアロンとホルがモーセの祈りを助けたとあるよう

に、祈りは個人的なものだけではなく、相互依存的なものでもあることも覚えましょう。つまり他のクリスチャンに遠慮なく祈ってもらうこと、祈りをリクエストすることです。それは神の家族として自然な姿でもあります。神様は私たちが自分ひとりで成功することを計画しておられないようです。大伝道者パウロでさえ、「福音の奥義を大胆に知らせることができるよう、祈ってください」(エペソ6・19)とエペソのクリスチャンたちに祈りを謙遜に要請しています。

また誰かと罪の告白をし合うことも霊的な戦いに効果的で力があります。「互に罪を言い表し、互いのために祈りなさい」(ヤコブ5・16)とあるように、伴侶や親子、同性の友人などに自分の罪の告白のできる相手を持つならば、依存症的な習慣を克服しやすくなります。

結論

クリスチャンライフを生き生きと送るためには、自分ひとりでは十分ではなく、必ずクリストのからだである他のクリスチャンとの交わりを必要とします。特に祈り合うことによって霊的戦いに打ち勝ってゆきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

8 アマレク アマレクはエサウの孫にその源を発する民であり(創世記36・12)、非常に好戦的な遊牧民である。この部族は、シナイ半島のカデシユの地に住んでいたといわれている。レフィデム 荒野におけるイスラエル人の宿营地のひとつ。

9 この節で語られるモーセの言葉によると、アマレクと戦ったイスラエルの軍隊は、職業的軍人ではなく、この戦いのために特別に選ばれた軍隊だったようである。そしてヨシユアはそのイスラエル急造軍を指揮する責任を任された。一方のアマレクは、非常に好戦的な民族であった。ヨシユア 聖書の中で、ヨシユアという名が記されるのはここが最初である。実際にはこの時の名は「ヨシユア」ではなく「ホセア」だったようである(民数記13・16)。いずれも名の意味は「主は救い」であり、ギリシャ語では「イエス」となる。出て行ってアマレクと戦いなさい モーセは前回イスラエルのつぶやきに対して、主に叫ぶことによって解決した(17・4)。しかし

今回はヨシユアに直接命じている。神の杖 この章(17章)における鍵の言葉のひとつである。この杖は出エジプトにおいても神の裁きの道具として用いられ(7・20、8・5他)、また渴きを潤す水を出す道具としても用いられた(17・6)。いわば神の力の象徴である。この杖の意味する神ご自身の臨在と、ヨシユアをはじめとする人間の服従とが、この奇跡の肝である。

10 フル この人物は、この箇所その他にはモーセがシナイ山に登っている間、モーセにかわって民を監督した(出エジプト24・14)という記録が残っている。

11・12 谷間での戦いの模様が簡潔に描かれている。しかし、出エジプト記の著者の関心は、戦いそのものではなく、あくまでもモーセの挙動に集中して描かれている。直接アマレクと戦って勝利を得たのはヨシユアであるが、勝利を決定したのはモーセを通して働かれた神ご自身であった。ここで、古来このモーセの行為が何を意味するかが問われてきた。まず、イスラエルの民に対しては主の旗印を高く掲げることを意味していると考えることができる。この考えは、特にモーセが握っている神の杖(9)あるいは15節の言葉との関連において語られる。

もう一つは両手を挙げて祈ることを意味する。ダビデは、「私は生きているかぎり、…両手を上げて祈ります」(新改訳第二版 詩篇63・4)と告白している。

しかし、ここでもう一つ私たちが考えるべきことは、この奇跡における神の介入の仕方である。神は、イスラエルとアマレクが戦うに際し、具体的には何も語られなかった。ここでモーセは、自らに与えられた最大の武器をもってアマレクに立ち向かったのである。すなわち、それが神の杖(信仰)であり、また執り成しの祈りだったのである。

12 既に齢80を越えたモーセにとって、この行為は疲れを伴うものであったに違いない。当然一日中両手をあげ続けることはできない。そこでアロンとホルが、両手をあげるモーセを支えるために必要であった。そしてその援助をモーセも快く受けたことであろう。日本人は、とかく援助を受けることにある種のためらいを覚えることが少なくない。しかし、同労者の助けを受けることを決して恥じてはならないのである。

14 この戦いの勝利は、イスラエルにとっては非常に重要な経験であったことは言うまでもない。それゆえ主は

この出来事を後生に伝えさせるために、この勝利を書物に記すこととそれを語り伝えさせることを求めた。文書に書き記し この指示は、イスラエルの伝承の中で特異なものである。イスラエルは「主の戦いの書」をもっていたといわれている(民数記21・14)。あるいは何らかの旅の記録をつけていたようである(同33・2)。このような記録がイスラエルの民を励ます役割を担ったことは想像できる。読んで聞かせよ この出来事を語り継がせるためであろう。

15 モーセはアマレクに対する勝利を記念して、祭壇を築き、それに「主はわが旗」(欄外注)という名を付けた。主がイスラエルのために戦われたことを感謝するためであった。

16 主の御座の上にある手 「旗」は、新改訳と新共同訳では「御座」と訳されている。いずれにしてもその意味するところは、右手を主の臨在の象徴である祭壇(あるいは旗)の上に置き、主の戦士のひとりとして、主に對して自らをささげるといふことである。

参考図書 8月29日分と同じ。

聖書 出エジプト20・1-17

タイトル 十戒
暗唱聖句 あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。 出エジプト20・3

目標 神の心を知り、その心に従う。

導入 (和田牧子)

皆さんには宝物がありますか？ 先生は子どもころシルヤかわいいいメモ帳を集めていました。とっても大切にしていました。皆さんの宝物も教えてほしいです。そして、何と何と、神様にとっては皆さん一人ひとり宝物なのです。

十戒は私たちの道しるべ

旧約聖書の創世記の次にある出エジプト記は、イスラエルの長い長い旅の様子が書かれています。エジプトという国で奴隷として大変厳しくつらい毎日を送っていたイスラエルの人々を神様はかわいそうに思つて、エジプトから脱出できるように道を開いてくださいました。神様はイスラエルの人々をとつても愛しておられたのです。そんなイスラエルのリーダーだったモーセはある日、

神様からシナイ山の頂上に招かれます。そこで神様は大切な十のお言葉を告げられます。「十戒」と呼ばれるものです。神様が私たち人間に願つておられるお心がよくわかります。そしてその十のお言葉は私たち人間が神様と一緒にこれからの人生を歩いていく時に、大切な道しるべとなってくれるのです。

皆さんは幼稚園や学校で生活をしているとき、どうしたら良いのかな？ と迷つてしまうことがあると思います。お友だちと遊ぶとき、お家で家族と過ごすとき、どう行動したらいいのか、何と言葉をかけたらいいいのか迷うことはありませんか？

こんなことをしていいのかな？ いや、やめておいたほうがいいのか？ そんな迷いややすい私たち、ときには罪の心がわいてきてしまう私たちが、神様に愛されている子どもとして、神様の宝物として、どう歩いて行けばよいのかをわかりやすいように示してくれているのが、今日の「十戒」と呼ばれる個所です。

わたしだけが神です！

その第一番目のお言葉が今日のみ言葉です。ね。「あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない」。

わたしが、あなたをエジプトの地、奴隷の地から導き出しました。わたしがあなたの神、主です！と神様は自己紹介をされているのですね。

神様にとってイスラエルの人々…沢山の大人もいれば、子どももいたと思いますが、一人ひとりをかけがえない宝としてとつても愛しておられました。それなのに、もし人々が偶像と呼ばれる金や石や木で作った神を拝むようになったとしたら、ただお一人の神様はどれほど悲しく心が痛むことでしょう。

ですから神様は「あなたは自分のために偶像を造ってはならない」「それらを拜んではならない」「あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神」とまで言われているのです。ねたむほどに神様は私たちのことが大好きで、大切に、いつも「私のほうを見てほしい」と強く願ってくださっているのですね。ここまで言われたら、もう「はい、あなただけがわたしの神。どうかこれからも私を導いてください！」とついていくしかありませんね。

真の自由を得るために

神様はどうしてこのような十戒を与えられたのでしょうか。「こうしなさい」「あしなさい」と規則でしる

ために与えられたのでしょうか？ きゅうくつな規則とかおきてとは少し違うようですよ。神様は私たちが罪の奴隷から自由になるためにこの十戒を与えてくださったのです。

そして現在に生きる私たちはイエス様によって真の自由をいただいています。イエス様が私たちの歩みの真のリーダーとなって、先頭に立って人生を導いてくださっています。何より私たちのすべての罪のためにイエス様は十字架にかかって血を流して死んでくださいました。その流された血によって私たちのすべての罪がきよめられると聖書は約束しています。それだけでなく復活されたイエス様が今も私たちと共に生きてくださって、私たちのこれからの人生の道しるべ、進むべき方向を照らす光となってくださいているのです。

結び

イエス様が一緒にいてくださること、これ以上の安心な人生はありません。ただお一人の神様、イエス様の愛にこたえて生きていきましょう。

♪あなただけがわれらの神♪

(ミクタムプレイズ&ワースhip 112)

聖書 出エジプト20・1～17 テーマ 十戒

序論

(高橋頼男)

十戒には、人間が神の前にどう生きるべきかについて神からの指針が記されています。人はいかに生きるべきか、何が善であり何が悪であるか、何を求め、何を避けるべきであるかについて、神の基準が明らかにされています。前半は神との関係について、後半は人との関係についての戒めから成っています。

一、神との正しい関係

人間は「関係性」(交わり)の中で生きるものとして創造されました。だれも一人ぼっちで生きる人はいません。常に他者との関係の中で生きており、その関係の正しき、豊かさがその人の幸せに直結しています。私たちは他者と愛し合い信頼し合うことができるなら、幸せを実感します。しかし、ぎくしゃくしているならしんどい生活を余儀なくされます。

しかし、人間関係の前に、神との関係があります。神は愛によって私たちを創造し、愛をもって私たちとかか

わりたいた切に願っておられます。このような神がいらっしゃるのですから、このお方を無視して人の幸いな生き方はありません。真に幸いな生き方を願うなら、まず、私たちの創造者である神を認め、このお方の前に真実なあり方、生き方が問われなければなりません。創造主との正しい関係を持ち、そのあるべき関係にふさわしく生きていくなら、私たちは真に豊かで祝福に満ちた人生を生きることができるのです。

二、神を第一とする(3)

〈あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない〉との第一戒は、神との関係において最も重要な事項で、後に続くすべての戒めの根幹をなします。人生は「わたし」が中心ではなく、目的でもなく、自己実現(神を第一としない人間の生き方の典型)が最高の生き方ではありません。また、自分の幸せや目的のために神を利用することも間違っています。

「真に人生を問うなら、まず、純粹に神から始めなければなりません。なぜなら神がわたしを造られたからです。私たちは自分で自分を造ったのではないので自分が何のために生きているのか分からないのは当然です。人

生を自分という間違った出発点から始めるなら人生に意味を持つことはできず、造り主である神から出発する時、私たちの人生は真に意味を持つものとなるのです」「(人生を導く五つの目的)リック・ウォレン)。

「万物は御子によって造られ、御子のために造られました」(コロサイ1・16)。

三、神に贖われた民(2)

私たちは神によって創造された者であるだけでなく、また、神によって贖^{あがな}われた民です。へわたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」と言われているように、この戒めは、神の力強い御手でエジプトから贖い出された民、イスラエルに對して命じられています。神に造られ祝福をされた人間が戒めを破って罪を犯し、虚しくなって神のさばきに服するものとなりました。しかし、神はそのような人間を憐^{あわ}れみ救い出して下さいました。神はその大きな愛のゆえに御子の命を代価として私たちを贖って下さいました。贖われたものは、当然、贖ってくださった方の所有となりました。しかも、驚くほどの大きな犠牲が支払われたのです。測り知れない父の愛と犠牲を想い、十字架

の上に命をささげられた御子の愛に迫られるとき、私たちの生き方を定める明確な決断が生まれます。

「キリストはすべての人のために死なれました。それは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためです」(Ⅱコリント5・15)。

四、神を愛する(マタイ22・37)

私たちが生かされているのは神を愛し、神のために生きるためです。このお方のためには、何ものにも優る愛をささげて生きるのです。何よりも神との関係(交わり)を大切にし、愛し、神と共に生きていくのです。私たちが神の戒めを守ることは苦痛ではありません。神を愛しているからです。それは自然なことであり、むしろ、神が嫌われること、神の愛に反することはしたくありません。主の御名を尊び、主日を神のために聖別し、主にある兄弟姉妹と共に主を賛美し礼拝することは私たちの心からの喜びです。

結論

「主よ、何ものにも優って、あなたを愛します」と申しあげましょう。

研究資料

(小平徳行)

十戒は、神とイスラエルの民との間に結ばれた契約の基礎をなすものであるが、民はこの契約を破り、やがてキリストによる新しい契約が結ばれた。クリスチャンはもはや律法の下にあるのではない（ローマ6・14）が、十戒は神と人、人と人とのあるべき関係を示しており、今日においても有効である。十戒は私たちに何が罪であるかを教え、キリストへと導く養育係としての役割を持つとともに（ガラテヤ3・24）、キリストによって成就され（マタイ5・17）、キリストに贖^{あがな}われた者が聖霊によってそこに生きることのできる恵みの約束となった。今回はその前半（第一―四戒）の対神関係に焦点を当てる。これらは「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（マタイ22・37）に集約される。もちろん、対神関係は対人関係と深く関わっており、切り離して考えることはできない。

テキスト

2 十戒の序文である。ここに神と民との関係が述べられている。**あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出**

したあなたの神、「主」である。すべての戒めは、贖いを土台とする。奴隷状態から解放された民は、この神の恵みに応え、主だけを愛し、信頼するように契約を結んだ。十戒は束縛ではなく、贖われた民の生き方が示されている。

3 あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。第一戒は信仰の原点を宣言しており、あらゆる戒めの根幹をなす。ここで命じているのは、まことの神以外のものを神としてはならないということ、つまり偶像の禁止である。他の神々や富だけでなく、主なる神以外に頼りにするものや、神以上に大切なものがあるならば、それが偶像となる。道徳的乱れは、神以外のものを神とするとところから始まる（ローマ1・24・25）。

4・6 あなたは自分のために偶像を造ってはならない。第二戒は礼拝様式に関する命令で、偶像を造ること、拝むこと、それに仕えることが固く禁じられている。偶像（ヘペセル）木や石を彫って造った物。口語訳では「刻んだ像」。ここでは像そのものを禁じており、たとえばこの神を礼拝するためであっても像を使用してはならない。これは神を対象物とし、人間が主体となる御利益^{ニリヤク}。

宗教と化してしまう。神は霊であるから、御霊と真理

によって礼拝すべきである(ヨハネ4・24)。古代近東では、神の像は、その神の臨在の証拠と考えられていたもので、これは例外的な戒めであった。**ねたみの神** 神はひたすらご自身の民に愛を注がれたからこそ、神だけを愛し仕えることを求められる。この熱情の極みは御子の十字架である。**三代、四代** 罪の直接的なさばきは犯した本人に臨む(エゼキエル18章)が、罪は子孫に影響を与え、連帯責任としてのさばきは歴史の中に現れる。**恵みを千代にまで施す** 「恵み」(ヘセド)は契約に基づく愛。神の愛は変わることがないゆえ、恵みは千代、つまり永遠に続く(エレミヤ31・3)。

7 あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしない 「みだりに」(ヘシャーウ)は「むなしい、偽り、悪を行う」という意味がある。第三戒は主の御名を軽々しく唱えたり、偽りの誓いのために用いたり(レビ19・12)、呪いなどに用いたりすることを禁じている。これは人間が自己目的のために神を利用することになり、神が主であるという本来の秩序が失われた状態である。またこの戒めは積極的には主の御名があがめられる

べきことを示している。

8-11 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ 「安息日」は「休む、やめる」(ヘシャーバス)から来ている。つまりこの日は、ただ休む日ではなく、今までしていたことをやめる日である。「聖なるものとする」とは、この日を神のための日として取って置くということである。第四戒は一週間のうちの一日を区別して労働を中止し、その日を特別に神のためにとっておくことを命じている。**七日目** この日は神の創造の御業を覚えて感謝する日であるとともに(11)、神がイスラエルをエジプトから救い出されたことを覚える日(申命記5・15)でもある。キリストの復活後、日曜日が主の日となった。復活の主を礼拝し、神の新しい創造を覚え、主の救いのみわざを感謝し賛美する日であり、その精神は安息日と同じである。

12-17 十戒の後半(第五-十戒) は対人関係について扱っており、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」(マタイ22・39)に集約される。

参考図書 8月15日分と同じ。

聖書

民数記21・4～9

タイトル

信じて見上げる

暗唱聖句

蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を
仰ぎ見ると生きた。 民数記21・9

目 標

キリストを信じ仰いで、救いの恵みを受
け取る。

青銅の蛇の話

(櫻井めぐみ)

それはイエス様が人となってこの世に生まれる一千年ほど前のことでした。エジプトで奴隷となって苦しんでいたイスラエルの民が、神様によって救い出されて、エジプトを脱出するのです。しかし、その道中にイスラエルの民が、神に不平不満を言いました。その文句を言ったのも、一回や二回のことではなく、もうしょっちゅうぶつぶつ言っていたのです。パンがない。水がない。肉が食べたいとか。みんなもしかしたら、同じようなことを言ったことがあるかもしれませんね。あれがない。これがほしい。でも神さまはイスラエルの人たちに、食べ物飲み物をあげなかったわけではありません。水を与え、マナというおいしい食べ物をつから降らせてくださ

いました。それなのに彼らは、文句を言っていました。それで神様は、燃える蛇を民の中に送ったのです。その蛇が民をかみ、多くの人が死んでしまいました。しかし、神様が彼らをかみそうに思い、モーセに命じました。「青銅の蛇を作って、それを旗ざおの上につけなさい。蛇にかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる。」そして実際に、その青銅の蛇を見上げた者は、生きたのです。でも、一方で、それを見ることをしなかった人は、バタバタと死んでいきました。「そんなことで治るはずがない」と、苦しみながら、結局死んでゆきました。ただ、頭をほんのちよつと上げて、その青銅の蛇を見上げさえすれば助かったのに。

イエス様がニコデモに語ったこと

それから約一千年後のことです。イエス様はこの出来事と、ご自分が後に十字架にかけられることを重ねて、ニコデモという人に話されたのです。「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。」(ヨハネ3・14～15)と。でも多くの人が、イエス様の十字架に対して、このイスラエル

の民と同じことをしています。「信じれば永遠のいのちを持つ」という知らせに対して「そんなに簡単でいいはずがない」と言います。神様を信じて、神に頼って生きるよりも、自分の力で何とかしたい。そう言つて、「信じる」という簡単なことを否定してしまいます。でも、救われて永遠のいのちを持つということは、人間の努力やがんばりでは決して不可能なことなのです。

十字架の意味

イエス様は神の御子でありながらこの世に人となって生まれ、その生涯の最後は最も残忍な死刑と言われている十字架にかけられて死にました。それは私たちの罪が赦され、イエス様を信じるすべての人に救いをもたらすためです。でもイエス様の十字架は、私たちが死んだ後に天国に行くことだけが目的なのではありません。今生きている現実の生活に大いにかかわってくることです。

神様の私たちに対する愛。その最大の現れが十字架なのです。イエス様が十字架で死なれたのは歴史的な事実であり、神様が愛のためにとられた行動です。愛そのものは目で見えることはできません。でも十字架は、神が私たちが愛しているということを表す、具体的な、目に見

える行動でした。だから、みんなが今、悩んだり苦しんだり不安な思いになる時には、イエス様の十字架を思い起こしてほしいのです。十字架にかけられたイエス様を見つめてください。それは全能の神が、あなたに向かつて「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ43・4）と言われていることの証拠だからです。ご自身の御子をさえ惜しまずに十字架につけられたほどの愛です。だから、十字架を見上げ、イエス様をじっと見つめる時に、ああ自分は大丈夫なんだ、つて、心にストンと落ちるものがあります。別に涙を流すほど感動しなくなっているんです。よくわからなくてもいいんです。私たちの状態がどうであつても、周りの人がどうであつても、神様は全能の神で、自分はそのお方に愛されている。その事実に変わりはありません。見れば見るほど、神の愛を深く知り、心に平安が与えられる。それが十字架です。イエス・キリストを信じて救いの恵みを受け取り、十字架にかけられたイエス様を見上げて歩んで行きましょう。

♪両手いっぱい愛♪（新聖歌483、イン41、ホ146他）

聖書 民数記21・4～9 テーマ 信じて見上げる

序論

(石田高保)

イエス・キリストを信じませんかと言われると、強い圧力を感じるかもしれません。キリスト教について何もかも知らなければいけないように受け取るかもしれません。それに対して今日の箇所からイエス様を信じて救われるということを、絵画的に理解することができます。

一、信じるとは見上げること

イスラエルが荒野をさまよって数十年が経ち、モーセの兄アロンは世を去りました。エドムの地を通ろうとしていたとき、民は生活の困難に耐えがたくなつて、神とモーセとに不平を言います。水もまともな食物もなく、マナという粗悪な食物はいやになりましたと。すると主は間髪を入れず火のへびを民のうちに送られ、へびは民をかんだので、おおぜいの人が死にました。火のへびとはひと噛みで死に至らせる猛毒を持つへびのことで、超自然的に出現したのかもしれませんが。同じような例が11章にあり、民が食べ物のことで不平を鳴らした時、非

常に激しい疫病で民は撃たれました。罪には必ず神のさばきが伴うことを重ねて教えています。しかしそのさばきを食べ止める救いのあることも今日の箇所は教えています。それは思いもよらない方法でした。

へびにかまれて多くの民が死に、また死につつあったとき、民は主がへびを取り去って下さるようにモーセに頼みました。そしてモーセが祈ると解決の道が示されました。しかしそれはへびを取り去ることではありませんでした。へびにかまれて死のうとしている民に対して主が示された救命の方法は、竿の上に掛けられた青銅のへびを見上げることだけでした。見上げるだけで命が助かるのです。思いもよらぬほど簡単な方法です。またなぜ青銅のへびなのかという説明もありません。ここには魂の救いのイラストレーションがあります。イエス様は言われます「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません」(ヨハネ3・14)、つまり主は青銅の蛇はご自分のことであり、この蛇が竿に上げられたように、自分も十字架に上げられなければならぬと言われたのです。それは十字架を見上げた者、つまり主を信じた者が、すべて永遠の命を得るためです。

二、見上げるだけで救われる

何かを見上げることは何の努力も要りません。頭を上げればいいだけです。その場合、深遠な十字架の奥義がわからなくてもかまいません。奇蹟的な出来事が起きなくても、感情的な高揚が伴う必要ありません。ただ神に自分自身をお任せしますと明け渡せばよいのです。日本人の宗教性から言えば、神・罪・救いという三段論法よりも、まず生けるキリストご自身を受け入れるように勧めたほうが効果的かもしれません。その場合、「イエス様を信じませんか」という表現は頭脳に働きかけるので、それよりも「イエス様を心の支えにしませんか」とか、「イエス様を心の拠り所としませんか」とか、「イエス様に人生をお任せしませんか」というほうがしっくりくるでしょう。実際、キリストの十字架が自分の身代わりであるということは、青銅のへびがなぜ救いの道につながるのか頭では理解できないのと同じところがあります。高校入試に合格したからと言って、入学式までに高校の授業内容を理解している必要はないように。

いずれにせよ、救いに導くハードルは高く上げないほうがよいですし、いたずらに難しくしないほうがよいで

しょう。なぜなら（それを仰ぎ見れば生きる）からです。導いたほうも相手が受け入れたことを信じてあげる必要もあります。「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった」（ヨハネ1・12）。そしてもっと大事なものはその後のフォローであり、点よりも線です。なぜなら救いの事実と救いの確信とは必ずしも同時ではないからです。救いの事実は神の側のことですからブレることはありません。しかし救いの確信は人間の側のことですからブレることがあります。そこで他のクリスチャンの出番です。飛行機が滑走し、離陸し、上昇し、巡行するまで操縦士と管制官とのやり取りは途切れません。新しいクリスチャンがキリストにある大人として成熟するように、できれば一対一で他のクリスチャンが関わるのが望ましいでしょう。そして今度は育てられた人が新しいクリスチャンに関わるのです。そのような育成の連鎖が起こるならば、マタイ28章の大宣教命令にかなうでしょう。

結論

十字架を見上げるだけで救われるという簡潔な真理を受け取り、他の人に受け取っていただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

イスラエルの民は、これまで荒野で何度も食物について不平を言ってきた(出エジプト16章、民数記11章)。こはイスラエルの民が食物について不平を言い、エジプトの食物にあこがれた最後の記録である。またここにキリストによる罪の贖いの福音が予表されている。

テキスト

4 民は、本来ならば北上すべきなのに、カデシユから葦の海の道を南進し、アカバ湾に向かった。これは砂漠への道である。**我慢がでなくなり** 直訳すると「魂は短くされた」となる。「短い魂」を持つとは、我慢できない、気持ちを抑制できない、自制を保てないこと、さらには徹底的に勇気がくじかれることを意味する。民は思うように進むことができないいらだちや、失望落胆の中にあった。ホル山でアロンが死んだことも大きな影響を与えたであろう。彼の死は自分たちの死をも意識させるものであった。

5 **神とモーセに逆らって言った** モーセに不平を言うことは、神に対して反抗することである。**みじめな食べ**

物 これは神が毎日供給しているマナであった。食べ物がほとんどない荒野で、このマナによって養われてきたにもかかわらず、民は神に感謝をせずに、不平不満を漏らした。またこのマナは、天よりのまことのパンであるイエス・キリストを予表するものであった(ヨハネ6:48-51)。私たちも救いの恵みを感謝せず、恵みに慣れてしまうならば、天からのまことのマナである御言葉や説教、祈りなど、神につける事柄が味気なくなり、飽きてしまう危険がある。

6 民の不平不満は主の激しい怒りを引き起こすことになった。**燃える蛇** この蛇にかまれると焼けつくような痛みと激しい毒のゆえにこう呼ばれたのであろう。または、その地方の毒蛇に見られる、燃えるような赤い斑点、あるいはそのうろこに陽が当たるときらきら輝くことから、このように呼ばれたのかもしれない。

7 **どうか、蛇を私たちから取り去ってください** イスラエルの民は、自分たちに襲いかかった災いが、神からの厳しい処罰であることに気が付き、自分たちの罪を悔い改め、モーセにとりなしを懇願した。

8 あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。蛇はイスラエルでは忌むべきもの、汚れたものであり、罪を象徴するものであった（創世記3章、レビ11・41～43）。主の答えは、民が求めたこと、つまり蛇を取り去って、これ以上かまれる者が出ないようにということとは違い、かまれた者が生きるというさらに勝る道であった。それと共に、ただ問題の解決を与えたのではなく、民の信仰、従順を求められた。ここに、不平を言う民に対する深いお取り扱いを見ることができ。不平不満は結局のところ、神の約束への不信仰から来る。この時、約束通り、仰ぎ見た者が生きることを通して、民は神の御言葉には間違いがないことを知ることになった。神は、イスラエルの民のうちから蛇を取り去る以上に、内心の不信仰を取り除かれたのである。

9 蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。青銅の蛇自体に救う力があつたのではなく、神の約束を信じて仰ぎ見た信仰に対して神の救いのわざがなされた。この青銅の蛇は保存されていたが、ある時点で、イスラエル人はそれを偶像に変え、ネフシュタンと

呼び、その前に香をたくようになった。そのため、ヒゼキヤ王が宗教改革の手始めとして、これを打ち砕いた（Ⅱ列王18・4）。

この青銅の蛇はイエス・キリストの型である。イエスはご自身が高く上げられることについて、この出来事に言及している（ヨハネ3・14）。十字架につけられ、高く掲げられたイエスを信仰によって仰ぎ見るとき、罪と死から救われるのである。民は青銅の蛇を仰ぐことによって、自分の罪の恐ろしい実態を悟ったことであろう。青銅の蛇が上げられたように、イエスは罪を象徴する蛇として十字架にかかってくださった。このことにより、罪なき神の子イエスが、罪とされ、私たちのためにのろいとなつてくださったのである（ガラテヤ3・13）。それは私たちがキリストにあつて神の義となるためであつた（Ⅱコリント5・21）。

参考図書 田辺滋『民数記』『新聖書注解・旧約Ⅰ』（いのちのことば社）、石黒則年『民数記』『実用聖書注解』ゴードン・J・ウェナム『ティンデル聖書注解・民数記』（いのちのことば社）、W・リガンズ『デイリースタディーバイブル・民数記』（新教出版社）、他。

聖書

ルカ7・36〜50

タイトル
暗唱聖句

罪赦された者として

この人は多くの罪を赦されています。彼

女は多く愛したのですから。ルカ7・47

目 標

罪が赦された者であることを実感し、キリストを愛して生きる。

「罪深い女」

(櫻井めぐみ)

今日のお話の中には一人の女性が出て来ます。聖書にはその女性について「罪深い女」としか書いてありません。彼女は一体どんなふうに罪深かったのでしょうか。聖書の説明が書かれているある注解書という本には「不道德な女、遊女」だとあります。彼女はその不道德な行いをすることによってお金をもらっていたのです。こういう女性は汚れていると思われる、周りからものすごく軽蔑されます。でも、もしかしたら彼女は、そうしないと生活できないほど貧しかったのかもしれない。決して自分で好き好んで「罪深い女」になったわけではなく、実はとてもつらかったのかも知れない。イエス様のもとに来て、涙を流したのですから。

涙の理由

でも彼女はイエス様のもとで涙を流した時、苦しくて泣いたわけではありませんでした。むしろその逆です。彼女は嬉しくて泣きました。イエス様に感謝していたのです。彼女はおそらく前にもイエス様の恵みのことばを聞いていたと思います。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのみに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」「貧しい人たちは幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」「・・・彼女は嬉しくて涙を流し、愛するイエス様の足に口づけして香油を塗ったのです。しかし、この場面を冷ややかに見ていた人物がいました。イエス様を食事に招いたパリサイ人シモンです。パリサイ人とは、昔から伝えられてきたルールや習慣を、いちいち細かく守っている人たちで、周りから尊敬されていました。でもシモンは心の内でイエス様と女性を見下していたのです。

あなたの罪は赦されています

そこでイエス様はシモンの思いを見抜いて、一つのとえ話をなさいました。金貸しが、二人の人の借金を帳消しにしてあげたけれど、この二人のどちらがたくさん

感謝するでしょうといつて、それはもちろん金額が大き
い方だよねと。それと同じで、多くの罪を赦された人が、
より多く愛する者となるということをイエス様は話され
たのです。多くの罪が赦されていることは私たちの喜び
です。イエス様が自分にどれだけのことをしてくださっ
たかを思うと、イエス様に対する愛が自然に湧き上がっ
てきます。イエス様は「この人は多くの罪を赦されてい
ます。彼女は多く愛したのですから。」と言われました
が、私たちが多く愛したから多くの罪が赦されるのでは
ありません。聖書の日本語は少し難しいですが、あくま
で、主が罪を赦してくださいだったことが先なのです。

また、赦される罪が多い少ないというのは、実際に犯
した罪の数ではありません。罪人という点ではパリサイ
人もこの女性もまったく同じだからです。だから、罪が
多く赦されているとか少ないということは、多くの罪が
自分にあることに気づいているかどうか？ その意識の
問題なのです。

あなたの信仰があなたを救った

ただし。もう一つ重要なことがあります。実は彼女は
決して「ただ」で罪が赦されたわけではないのです。借

金帳消しのたとえ話をイエス様はなさいましたが、彼女
の罪もみんなの罪も、それらがすべて赦されるためには
必要な代金が支払われなければなりませんでした。私た
ちには罪があります。それはたとえるならば、絶対に返
せない額の借金を負っているようなものなのです。私た
ちはそれを自分で返済して罪を無しにすることができな
いので、本当は地獄に行かなければなりません。でも、
私たちの罪を帳消しにするために支払われたものがあり
ました。それは他でもない、イエス様のいのちです。私
たちの罪の代価としてイエス様が身代わりとなり、十字
架で死んでくださったことによって私たちの罪は赦され
たのです。私たちを地獄から取り戻すために、イエス様
はご自分のいのちという、ふつうじゃ考えられないほど
の莫大な代価を支払ってくださいました。「信仰」とは
それを信じることです。それが「あなたの信仰」です。
イエス様によつて罪が赦されたことを信じましょう。イ
エス様は、みんなにも言われています。「あなたの信仰
があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

♪主われを愛す♪（新聖歌505）

聖書 ルカ7・36〜50 テーマ 罪赦された者として

序論

(高橋頼男)

イエスを食事に招いたパリサイ人シモンの家に、その町で罪深い女（不道徳な女、遊女）であった者が、香油の入った石膏の壺をもってきて、泣きながらイエスの後ろでみ足のそばに立ち、涙でみ足をぬらし、髪の毛でぬぐい、み足に口づけし、香油をぬりました。女の大胆な行為に対して、シモンをはじめその場にいた人々は驚きました。さらに、罪の女のような行為を黙って許しておられるイエスを驚きあやしんで見つめました。

一、イエスのたとえと解き明かし(40〜47)

シモンは、この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いのだから」と心ひそかに思いました。しかし、イエスは女とその行為のわけをご存じでした。そしてこの女に対する見方は、シモンと全く異なっていたのです。イエスはシモンが心で考えていることを見抜いて、一つのたとえを語られました。五百デナリの

借金を赦してもらった者と、50デナリを赦してもらった者とは、どちらが余計にその人を愛するかと話されました。このたとえによりイエスは、彼女の多くの罪が赦されており、この大膽な行為は、彼女が罪の赦しをいかに感謝しているか、その喜びをいかに表しているものであるかを明らかにされました。さらに、この女と比較して、イエスを食事に招いたシモンの誠意がいかにうわべのものであり、こころがなく、愛と尊敬を逸したものであるかを、シモンが直接に主の質問に答えることを通して明らかにされました。この女とシモンのイエスに対する態度の違いはどこから来るのでしょうか。

二、罪の赦しについて(47〜50)

この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することと少ないのです」のことは、女の溢れる愛と、シモンの冷やかかな心との違いをみごとに言い当てています。

この女は、すでに罪の赦しを受けていました。いつ、どこで罪の赦しを確信したのでしょうか。イエスが福音を語られた時、聴衆の一人であったのか、人づてに聞いたのか、とにかく、イエスの語られた福音が、彼女に罪

の赦しを確信させたと思われます。彼女は自分がいかに罪深い者であるかを知っており、罪が赦される資格さえない者であると思いました。しかしイエスの權威ある救いの言葉を聞いた時、自分の罪が赦されたことを確信し、それが踊り上がるほどの喜び、溢れる感謝となったことでしょう。罪を深く自覚する者にだけ、イエスの言葉は、良い知らせ、喜びに満ちた福音となって届くのです。

私たちは、福音のメッセージを聞くたびに、自分の罪の深さ、また、罪の赦しの大きさ、とりわけ、十字架にその尊い命を犠牲にしてくださいと御子の愛を覚え、最愛の独り子をさえ、惜しまずに犠牲としてさげてください。父なる神の愛を思わずにはいられません。

三、大胆な愛と奉仕(37〜38)

この女が抱いた罪の赦しの恵みと感謝の思いが主への愛となり、主に対する切なる奉仕の願いにつながりました。彼女が主に近づくために、パリサイ人シモンの家に入って行った時、一斉に彼女に向けられた人々の視線は、冷ややかな、蔑みと非難、嫌悪感^{さげす}さえ含むものでした。彼女はそれを全身で痛いほど感じ取ったことでしょう。その場から逃げ出してしまいたいと思ったでしょう。し

かし、イエスに対する感謝と愛がそれに打ち勝ち、彼女を、一連の香油そそぎの奉仕へと駆り立てました。イエスは、この女の奉仕を喜んで受けられ、さらに、女に向かって「あなたの罪は赦されています」と宣言され、さらには、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と語ってくださいました。

イエスは、預言者ではありません。救い主です。どんな罪をも赦し、きよめ、聖霊を注いで新しい人生に歩ませてくださる救い主です。私たちも、イエスによって罪を赦された者です。しかし、主を愛することや人々を愛することはどうでしょうか。シモンのように冷ややかな心、おごりな奉仕、自分を誇って人々をさばくようなところがないでしょうか。神の前にへりくだりましょう。そして、主に対する熱い愛と感謝があるかどうか、奉仕がおごりになっていないか、高ぶっていないか、ご聖霊によって探っていただきましょう。

結論

罪赦された喜びと感謝をもって、主に仕える者とならせていただきましょう。主を愛し、喜んで仕える霊を注いでいただきましょう。

研究資料

(中島啓一)

香油注ぎの記事は四福音書すべてにあるが、ルカだけは別の出来事だと考えられている。ヨハネ(12・1～11)はベタニアの三姉弟の家でマリアがイエスの足に香油を注いだとし、マルコ(14・3～9)とマタイ(26・6～13)はベタニアにあるツアラアトの人シモン(三姉弟の父の名か?)の家でひとりの女がイエスの頭に香油を注いだとしている。枝葉の違いはあるが、これら三福音書の記事は同じ出来事だとする見方が優勢である。ルカだけが別だと考えられる理由は、シモンが「パリサイ人」(36)であること、その女性が「罪深い女」(37)とされていること、そしてイエスへの香油注ぎの意図が「埋葬する備え」(マタイ26・12他)ではなく、罪赦されたことに対する感謝の応答であることなどである。

テキスト

36 食卓に着かれた イエスは当時の作法に基づき、片肘をついて横たわり、足を後方にのばして席に着かれた。

37 罪深い女 娼婦や不道徳な女性の婉曲表現。その悪評が町中に知れ渡っていたのであろう。なお、招待さ

れていない者が教えや施しを請うために家に入ることに
ついて、当時の社会は寛大であった。香油の入った石膏
の壺 容器も高価だが、中身はさらに高価であった。こ
の女性の本来の目的は、イエスへの感謝の表現として香
油を(おそらく頭に)ささげることであったのだろう。

38 泣きながら 罪を赦されたことに対する感謝の涙で
あろう。もちろんそこに悔改めの意味も含まれていたと
見ることもできる。うしろからイエスの足もとに近寄り
イエスは食卓から足を壁側に向けて横たわっていたの
で、足もとには近づくことができたが、頭までは遠かつ
た。イエスの足を涙でぬらし始め 意図的にというより
は、あふれ出る涙が思わずイエスの足の上に落ちたとい
うのが真相に近いだろう。髪の毛でぬぐい 予期せずイ
エスの足を涙でぬらしてしまったので、とっさに髪でぬ
ぐったのかもしれない。その足に口づけして 接吻は深
い敬意や感謝を表す行為であった。香油を塗った 香油
は王の頭に注ぐにふさわしいもの。願っていた頭までは
近づけなかったが、あふれ出る感謝から、彼女はその貴
重な香油をイエスの足に惜しみなく注いだのである。

39 イエスがこの悪評高い女性の行為を拒まないことを

シモンは内心で批判した。この人がもし預言者だったらイエスは預言者かもしれないという人々の期待に懐疑的であつたシモンの思いに反し、イエスはこの女性の状態だけでなく、シモンの心の内まで見通しておられた。

42 返すことができなかったので、金貨は二人とも借金を帳消しにしてやった。ここに人の功績によらない神の恵みの完全なる一方性がはつきりと示されている。

44-46 それから彼女の方を向き、シモンに言われたシモンが非礼であつたという指摘もあるが、当時の風習を鑑みると必ずしもそうではない。とはいえ、彼はなすべきノルマを果たしたに過ぎなかった。それに対して、この女性は、罪を赦された喜びと感謝を、とどめることのできない愛のわざによって表したのである。

47 この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。その女性の愛の功績に対し赦しを与えられたという意味ではない。「愛した」は不定過去（過去に起こった一回的な出来事）、「赦されている」は現在完了（過去の出来事の結果が現在も続いていることを表す）であり、彼女は「愛した」より前に「赦されて」いたのである。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたし

に示した愛の大ききで分かる」（新共同訳）がより分かりやすい。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。自分は神の恵みからもらえるほど罪深くはないと自己過信する人には、神の恵みの真の深さは分からないという意味だろう。

48 あなたの罪は赦されています。ここも現在完了。この女性はこの時初めて赦されたのではない。イエスは、すでに彼女が得ていた赦しを確認・保証されたのである。

49 罪を赦すことさえするこの人。祭司は罪の赦しを宣告するだけであるが、イエスは罪の赦しを「行われた」。人々は、イエスが預言者以上の權威を持つ方であると認めざるを得なかった。

50 あなたの信仰があなたを救ったのです。救いが愛などの行為によるのではなく、恵みによることがここでも明らかに示される。安心して行きなさい。直訳は「平安の中へ行きなさい」。恵みを保つのではなく、恵みがその人を保つのである。

参考図書 注解書 *Elis* (NCB), *Marshall* (NIGTC), *Nolland* (Word), 榊原康夫 (新聖書注解 新約1)。その他 *The IVP Bible Background Commentary*: NT

救い主と出会う

ルカ 19・10

●詩歌

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

7月4日

創造者を覚える 伝道12・1〜14

同1節

●キリストとは誰か

7月11日

世の光である
キリスト ヨハネ9・1〜11
同5節

18日

良い羊飼いで
あるキリスト ヨハネ10・1〜15
同11節

25日

いのちである
キリスト ヨハネ11・17〜27
同25節

●モーセ

8月15日

過越

出エジプト12・1〜14

同13節

22日

海を渡る

出エジプト14・10〜27

同13節

29日

マナ

出エジプト16・31〜36

同35節

9月5日 ラーデー 祈りの手

出エジプト17・8〜16

同11節

12日

十戒

出エジプト20・1〜17

同3節

19日 信じて見上げる 民数記21・4〜9

同9節

●キリストとの出会い

9月26日

罪赦された者
として

ルカ7・36〜50

同47節

8月1日

道であるキリスト

ヨハネ14・1〜6

同6節

8日

ぶどうの木で
あるキリスト

ヨハネ15・1〜8

同5節

おわりに

『牧羊者』二〇二一年度Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は東加茂聖書教会の泉田勝栄師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇三年度Ⅱ～Ⅳ巻に掲載された長島幸雄師の原稿を一部編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」はお休みしました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

メッセージ例	和田牧子師	飯田勝彦師	土屋開夫師
聖書講解	後藤真師	櫻井めぐみ師	
研究資料	宮澤清志師	小泉創師	石田高保師
	高橋頼男師	福井文彦師	
ワーク(A)	加藤満師	宮澤清志師	辻林和己師
(B)	小平徳行師	中島啓一師	
(C)	鎌野幸師	宇野真佑美師	吉田美穂師
	石川剛士師	勝田幸恵師	竹崎光則師
	野勢かほる師	田中裕明師	上森恭子師
	勝田幸恵師	八幡直人師	後藤健一師
中高科へのヒント	後藤健一師	石田高保師	三輪正見師
子ども聖書日課	小野淳子師	田中愛子師	金田ゆり師
フラッシュカード	後藤栄子師	柴田福音師	加藤満師
み言葉カード・イラスト	松浦あん姉	丹羽遥姉	
	後藤栄子師	柴田福音師	加藤満師
	松浦あん姉		
ワープロ打ち込み	多田豊子師		
校正	後藤健一師	中島啓一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇二一年度Ⅱ巻

二〇二一年七月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三三三一九

電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 576-1396

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-1750号